

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	平成28年10月1日
(第70期)	至	平成29年9月30日

浜松ホトニクス株式会社

静岡県浜松市東区市野町1126番地の1

(E01955)

目次

頁

表紙

第一部 企業情報	2
第1 企業の概況	2
1 主要な経営指標等の推移	2
2 沿革	4
3 事業の内容	5
4 関係会社の状況	7
5 従業員の状況	9
第2 事業の状況	10
1 業績等の概要	10
2 生産、受注及び販売の状況	11
3 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	12
4 事業等のリスク	13
5 経営上の重要な契約等	13
6 研究開発活動	14
7 財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	16
第3 設備の状況	19
1 設備投資等の概要	19
2 主要な設備の状況	19
3 設備の新設、除却等の計画	21
第4 提出会社の状況	22
1 株式等の状況	22
(1) 株式の総数等	22
(2) 新株予約権等の状況	22
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	22
(4) ライツプランの内容	22
(5) 発行済株式総数、資本金等の推移	23
(6) 所有者別状況	23
(7) 大株主の状況	24
(8) 議決権の状況	26
(9) ストックオプション制度の内容	26
2 自己株式の取得等の状況	27
3 配当政策	28
4 株価の推移	28
5 役員の状況	29
6 コーポレート・ガバナンスの状況等	31
第5 経理の状況	39
1 連結財務諸表等	40
(1) 連結財務諸表	40
(2) その他	73
2 財務諸表等	74
(1) 財務諸表	74
(2) 主な資産及び負債の内容	87
(3) その他	87
第6 提出会社の株式事務の概要	88
第7 提出会社の参考情報	89
1 提出会社の親会社等の情報	89
2 その他の参考情報	89
第二部 提出会社の保証会社等の情報	90

[監査報告書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成29年12月22日
【事業年度】	第70期（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）
【会社名】	浜松ホトニクス株式会社
【英訳名】	HAMAMATSU PHOTONICS K.K.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 晝馬 明
【本店の所在の場所】	静岡県浜松市東区市野町1126番地の1 （注）上記は登記上の本店所在地であり、実際の本社業務は「最寄りの連絡場所」において行っております。
【電話番号】	053(434)3311（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役管理部長 森 和彦
【最寄りの連絡場所】	静岡県浜松市中区砂山町325番地の6（日本生命浜松駅前ビル）
【電話番号】	053(452)2141（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役管理部長 森 和彦
【縦覧に供する場所】	浜松ホトニクス株式会社東京支店 （東京都港区虎ノ門三丁目8番21号虎ノ門33森ビル） 株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第66期	第67期	第68期	第69期	第70期
決算年月	平成25年9月	平成26年9月	平成27年9月	平成28年9月	平成29年9月
売上高 (百万円)	102,156	112,092	120,691	121,852	130,495
経常利益 (百万円)	17,883	22,531	24,658	20,050	24,037
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	11,529	15,155	16,598	14,419	17,777
包括利益 (百万円)	17,357	17,464	19,224	4,765	23,224
純資産額 (百万円)	154,385	168,815	180,770	169,716	187,558
総資産額 (百万円)	198,278	215,412	226,179	217,300	239,331
1株当たり純資産額 (円)	1,913.98	1,046.56	1,120.38	1,075.31	1,188.30
1株当たり当期純利益 (円)	143.41	94.26	103.23	90.23	113.00
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	77.6	78.1	79.6	77.8	78.1
自己資本利益率 (%)	7.8	9.4	9.5	8.3	10.0
株価収益率 (倍)	25.8	27.6	26.2	34.2	30.1
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	14,688	23,135	16,046	24,160	26,154
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△6,493	△13,677	△17,057	4,186	△13,198
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	△4,052	△4,139	△4,878	△15,413	△5,707
現金及び現金同等物の期末残高 (百万円)	42,852	49,281	45,556	53,595	63,385
従業員数 (名)	4,415	4,420	4,482	4,592	4,683

(注) 1 売上高には消費税等は含まれておりません。

2 従業員数については、就業人員数を記載しております。

3 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4 平成27年4月1日付で、1株につき2株の割合で株式分割を行っております。そのため、第67期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、1株当たり当期純利益を算定しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第66期	第67期	第68期	第69期	第70期
決算年月	平成25年9月	平成26年9月	平成27年9月	平成28年9月	平成29年9月
売上高 (百万円)	80,937	92,583	99,157	101,786	110,200
経常利益 (百万円)	11,543	18,340	17,883	15,854	20,048
当期純利益 (百万円)	8,331	12,851	12,182	11,922	16,044
資本金 (百万円)	34,928	34,928	34,928	34,928	34,928
発行済株式総数 (株)	83,764,984	83,764,984	167,529,968	167,529,968	167,529,968
純資産額 (百万円)	136,358	145,174	149,933	145,992	157,483
総資産額 (百万円)	173,354	186,463	188,392	184,019	198,798
1株当たり純資産額 (円)	1,693.28	901.38	930.95	926.44	999.35
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額) (円)	50.00 (23.00)	55.00 (25.00)	49.00 (30.00)	34.00 (17.00)	34.00 (17.00)
1株当たり当期純利益 (円)	103.46	79.79	75.64	74.48	101.81
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	78.7	77.9	79.6	79.3	79.2
自己資本利益率 (%)	6.2	9.1	8.3	8.1	10.6
株価収益率 (倍)	35.7	32.6	35.7	41.4	33.4
配当性向 (%)	48.3	34.5	44.9	45.6	33.4
従業員数 (名)	3,106	3,147	3,197	3,270	3,357

(注) 1 売上高には消費税等は含まれておりません。

2 第66期の1株当たり配当額50円には、創立60周年記念配当4円が含まれております。

3 従業員数については、就業人員数を記載しております。

4 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

5 平成27年4月1日付で、1株につき2株の割合で株式分割を行っております。そのため、第67期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、1株当たり当期純利益を算定しております。

6 平成27年4月1日付で、1株につき2株の割合で株式分割を行っております。第68期の1株当たり配当額は、株式分割前の中間配当額30円と株式分割後の期末配当額19円を合算した49円となっております。

2 【沿革】

昭和23年9月	堀内平八郎が、電子管の製造・販売を事業目的として、東海電子研究所を静岡県浜松市海老塚（現静岡県浜松市中区海老塚）に設立
昭和28年9月	東海電子研究所の業容の拡大に対応するため、浜松テレビ株式会社（資本金50万円）を浜松市海老塚（現浜松市中区海老塚）に設立、東海電子研究所の業務をそのまま引継ぐ
昭和36年12月	東京都港区に事務所を新設（現東京支店）
昭和39年10月	浜松市市野町（現浜松市東区市野町）に工場新設（現本社工場）
昭和41年7月	ニューヨーク市に駐在員事務所を新設（現ハママツ・コーポレーション 連結子会社）
昭和42年12月	浜松市市野町（現浜松市東区市野町）へ本社を移転
昭和48年7月	静岡県磐田郡豊岡村（現磐田市）に工場新設（現豊岡製作所） 独国にハママツ・テレビジョン・ヨーロッパ・ゲー・エム・ベー・ハー設立（現ハママツ・ホトニクス・ドイチュラント・ゲー・エム・ベー・ハー 連結子会社）
昭和53年12月	事業目的に医療機器等の研究、試作、製造及び販売を追加
昭和54年4月	大阪市東区（現中央区）に大阪営業所を新設
昭和56年6月	浜松市天王町（現浜松市東区天王町）に工場新設（現天王製作所）
昭和58年1月	浜松市常光町（現浜松市東区常光町）に工場新設（現常光製作所）
昭和58年4月	浜松テレビ株式会社を浜松ホトニクス株式会社に社名変更
昭和58年6月	米国にホトニクス・マネージメント・コーポ（現連結子会社）設立
昭和59年8月	株式店頭登録（日本証券業協会）
昭和60年1月	浜松市砂山町（現浜松市中区砂山町）に本社事務所新設
昭和60年4月	茨城県つくば市に筑波研究所新設
昭和60年7月	仏国にハママツ・ホトニクス・フランス・エス・ア・エール・エル（現連結子会社）設立
昭和63年3月	英国にハママツ・ホトニクス・ユー・ケイ・リミテッド（現連結子会社）設立
平成2年2月	静岡県浜北市（現浜松市浜北区）に中央研究所新設
平成3年6月	コア電子工業株式会社の営業全部を譲受ける
平成6年7月	浜松市新都田（現浜松市北区新都田）に都田製作所新設
平成8年7月	株式を東京証券取引所市場第二部に上場
平成10年3月	東京証券取引所の市場第一部銘柄に指定
平成20年10月	浜松市西区に産業開発研究所を開設
平成23年8月	中国に浜松光子学商貿（中国）有限公司（現連結子会社）設立

3 【事業の内容】

当社グループは、浜松ホトニクス株式会社（当社）、子会社18社及び関連会社3社で構成されており、光電子増倍管、イメージ機器及び光源、光半導体素子、画像処理・計測装置等の光関連製品の製造、販売を主な事業とし、かつ、これらに付帯する事業を営んでおります。

当社グループの事業に係る位置づけは次のとおりであります。

なお、電子管事業、光半導体事業、画像計測機器事業及びその他事業の各事業は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項（セグメント情報等）」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

(1) 電子管事業

光電子増倍管、イメージ機器及び光源

当社が製造販売するとともに、子会社のハママツ・コーポレーション、ハママツ・ホトニクス・ドイチュラン・ゲー・エム・ベー・ハー、ハママツ・ホトニクス・フランス・エス・ア・エール・エル、浜松光子学商貿（中国）有限公司他海外子会社を通じ販売しております。また、当社は、光電子増倍管につきましては、国内子会社の高丘電子㈱、浜松電子プレス㈱、海外子会社の北京浜松光子技術股份有限公司より加工部品を仕入れており、光源につきましては、国内子会社の㈱光素より加工部品を仕入れております。

(2) 光半導体事業

光半導体素子

当社が製造販売するとともに、子会社のハママツ・コーポレーション、ハママツ・ホトニクス・ドイチュラン・ゲー・エム・ベー・ハー、ハママツ・ホトニクス・フランス・エス・ア・エール・エル、浜松光子学商貿（中国）有限公司他海外子会社を通じ販売しております。また、当社は、国内関連会社の浜松光電㈱より加工部品を仕入れております。

(3) 画像計測機器事業

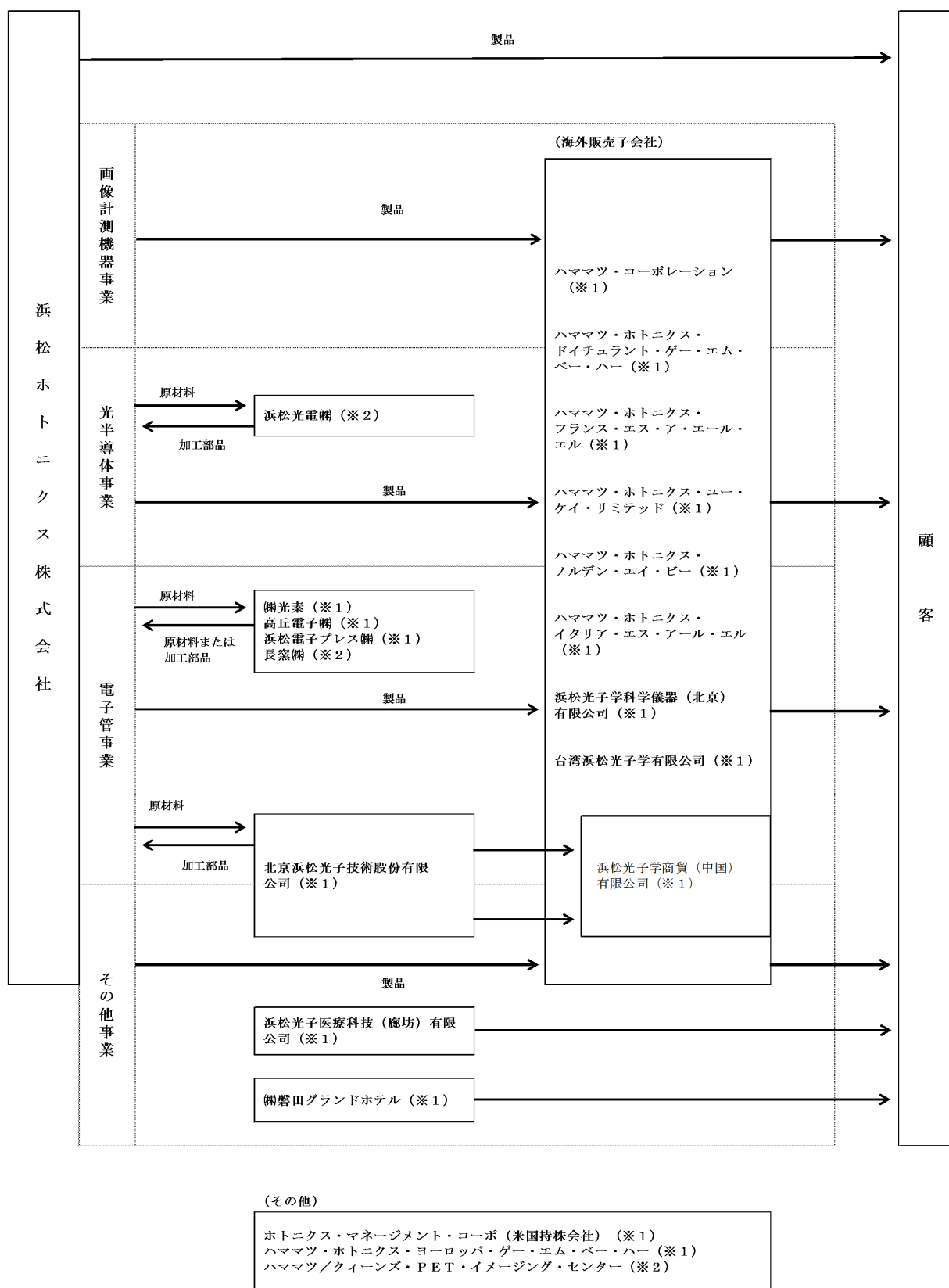
画像処理・計測装置

当社が製造販売するとともに、子会社のハママツ・コーポレーション、ハママツ・ホトニクス・ドイチュラン・ゲー・エム・ベー・ハー、ハママツ・ホトニクス・フランス・エス・ア・エール・エル、浜松光子学商貿（中国）有限公司他海外子会社を通じ販売しております。

(4) その他事業

半導体レーザーに係る事業、子会社の㈱磐田グランドホテルが営むホテル事業及び子会社の北京浜松光子技術股份有限公司の独自製品に係る事業を含んでおります。

以上に述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



(注) ※1 連結子会社

※2 持分法適用関連会社

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金	主要な事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) ホトニクス・マネージメント・ コーポ (注1)	米国 ニュージャージー州	千米ドル 33,521	持株会社	100.0	当社に不動産を賃貸して おります。 役員の兼任等…有
浜松光子学商貿（中国）有限公 司	中国 北京市	千中国元 50,000	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0	当社の製品を販売してお ります。 役員の兼任等…有
ハママツ・ホトニクス・ドイ チュラント・ゲー・エム・ペー・ ハー (注1) (注5)	独国 ヘルシンク市	千ユーロ 2,000	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0	当社の製品を販売してお ります。
ハママツ・ホトニクス・フラン ス・エス・ア・エール・エル	仏国 マッシー市	千ユーロ 1,136	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0	当社の製品を販売してお ります。
ハママツ・ホトニクス・イタリ ア・エス・アール・エル	伊国 アレーゼ市	千ユーロ 728	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0	当社の製品を販売してお ります。
台湾浜松光子学有限公司	台湾 新竹市	千台湾ドル 30,000	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0	当社の製品を販売してお ります。 役員の兼任等…有
ハママツ・ホトニクス・ユー・ ケイ・リミテッド	英国 ハートフォードシャ ー	千英ポンド 400	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0	当社の製品を販売してお ります。
(株)光素	静岡県 磐田市	千円 85,000	光源の製造	100.0	当社の製品を加工してお ります。 役員の兼任等…有
ハママツ・ホトニクス・ノルデ ン・エイ・ビー	スウェーデン王国 シスタ市	千スウェーデン クローネ 2,700	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0	当社の製品を販売してお ります。
ハママツ・ホトニクス・ヨーロ ッパ・ゲー・エム・ペー・ハー	独国 ヘルシンク市	千ユーロ 200	欧州における販売促進	100.0	—
北京浜松光子技術股份有限公司	中国 北京市	千中国元 200,000	光電子増倍管等の製造販売	94.0	当社の製品を加工してお ります。 役員の兼任等…有
高丘電子(株)	静岡県 浜松市中区	千円 98,000	光電子増倍管の製造	88.6	当社の製品を加工してお ります。 役員の兼任等…有
浜松電子プレス(株)	静岡県 磐田市	千円 95,000	電子部品、金型の製造	72.1	当社の製品を加工してお ります。
(株)磐田グランドホテル	静岡県 磐田市	千円 480,000	ホテル事業	57.1	当社は施設を利用してお ります。 役員の兼任等…有
浜松光子医療科技（廊坊）有限 公司	中国 河北省廊坊市	千中国元 18,000	医療機器及び関連製品の製 造販売	100.0 (100.0)	—
浜松光子学科学儀器（北京）有 限公司	中国 北京市	千中国元 5,000	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0 (100.0)	当社の製品を販売してお ります。 役員の兼任等…有
ハママツ・コーポレーション (注1) (注5)	米国 ニュージャージー州	千米ドル 426	光電子増倍管、イメージ機 器及び光源、光半導体素 子、画像処理・計測装置の 販売	100.0 (100.0)	当社の製品を販売してお ります。 役員の兼任等…有

名称	住所	資本金	主要な事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(持分法適用関連会社) ハママツ／クィーンズ・PET・ イメージング・センター	米国 ハワイ州	千米ドル 8,001	PETを用いた医療診断及び 研究開発	30.0 (30.0)	役員の兼任等…有
浜松光電㈱ (注4)	静岡県 磐田市	千円 79,500	光半導体素子の製造販売	18.9	当社の製品を加工してお ります。
長窯㈱ (注4)	長野県 長野市	千円 55,004	電子部品の製造販売	17.4	当社に製品を販売してお ります。 役員の兼任等…有

- (注) 1 ホトニクス・マネージメント・コーポ、ハママツ・コーポレーション及びハママツ・ホトニクス・ドイチュ
ラント・ゲー・エム・ベー・ハーは特定子会社に該当いたします。
- 2 上記のうち、有価証券届出書または有価証券報告書を提出している会社はありません。
- 3 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で、内数であります。
- 4 持分は100分の20未満ですが、実質的な影響力を持っているため関連会社としたものであります。
- 5 ハママツ・コーポレーション及びハママツ・ホトニクス・ドイチュラント・ゲー・エム・ベー・ハーにつ
きましては、売上高（連結会社相互間の内部売上高を除く）の連結売上高に占める割合が10%を超えておりま
す。

ハママツ・コーポレーションの主要な損益情報等は次のとおりであります。

(1) 売上高	36,933百万円
(2) 経常利益	2,554
(3) 当期純利益	1,486
(4) 純資産額	10,709
(5) 総資産額	19,435

ハママツ・ホトニクス・ドイチュラント・ゲー・エム・ベー・ハーの主要な損益情報等は次のとおりであり
ます。

(1) 売上高	16,807百万円
(2) 経常利益	1,294
(3) 当期純利益	957
(4) 純資産額	6,093
(5) 総資産額	7,279

- 6 当社は、平成29年9月に、光源の製品ラインナップを拡充することを目的として、ホトニクス・マネー
ジメント・コーポがエナジティック・テクノロジー・インクの全株式を取得し、同社の子会社とすることを決議
いたしました。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(平成29年9月30日現在)

セグメントの名称	従業員数 (名)
電子管事業	1,875
光半導体事業	1,321
画像計測機器事業	516
その他事業	306
全社 (共通)	665
合計	4,683

- (注) 1 従業員数は就業人員数であり、臨時雇用者数については従業員の100分の10未満のため記載を省略しております。
- 2 全社 (共通) として、記載されている従業員は、特定のセグメントに区分できない管理部門等に所属しているものであります。

(2) 提出会社の状況

(平成29年9月30日現在)

従業員数 (名)	平均年齢 (才)	平均勤続年数 (年)	平均年間給与 (円)
3,357	40.3	16.1	6,725,561

セグメントの名称	従業員数 (名)
電子管事業	1,083
光半導体事業	1,106
画像計測機器事業	401
その他事業	106
全社 (共通)	661
合計	3,357

- (注) 1 従業員数は就業人員数であり、臨時雇用者数については従業員の100分の10未満のため記載を省略しております。
- 2 全社 (共通) として、記載されている従業員は、特定のセグメントに区分できない管理部門等に所属しているものであります。
- 3 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

当社の労働組合は、浜松ホトニクス労働組合と称し昭和36年9月10日に結成され、平成29年9月30日現在組合員数は2,835名であります。所属上部団体として産業別労働組合JAMに属しており、労使関係は極めて良好であります。

第2【事業の状況】

1【業績等の概要】

(1) 業績

当連結会計年度におけるわが国経済は、欧米の政治動向や東アジアにおける地政学的リスクの高まり等の懸念はありましたが、輸出に持ち直しの動きが見られ、企業収益が改善する中で設備投資も緩やかな増加基調となるなど総じて回復基調で推移いたしました。

このような状況におきまして、当社グループは、長年培ってまいりました独自の光技術のさらなる向上を図るとともに、生産能力の増強や開発力の強化に向けた設備投資を継続することで、売上高、利益の拡大に努力してまいりました。

なお、当連結会計年度の業績につきましては、国内売上げ、海外売上げともに増加いたしました結果、売上高は130,495百万円と前年同期に比べ8,643百万円（7.1%）の増加となりました。一方、利益面につきましても同様に、営業利益は22,849百万円と前年同期に比べ2,305百万円（11.2%）増加し、経常利益は24,037百万円と前年同期に比べ3,986百万円（19.9%）増加し、親会社株主に帰属する当期純利益につきましても17,777百万円と前年同期に比べ3,357百万円（23.3%）の増加となり、増収増益となりました。

セグメントの業績は、次のとおりであります。

〔電子管事業〕

光電子増倍管は、高エネルギー物理学実験等の学術向けの売上げが増加したことなど、売上げは増加いたしました。

イメージ機器及び光源は、産業分野において、非破壊検査用のマイクロフォーカスX線源の売上げが海外を中心に好調に推移するなど、売上げは増加いたしました。

以上の結果、光電子増倍管、イメージ機器及び光源をあわせました電子管事業といたしましては、売上高は48,744百万円（前年同期比6.9%増）、営業利益は16,992百万円（前年同期比10.8%増）となりました。

〔光半導体事業〕

光半導体素子は、医用分野において、フラットパネルセンサが歯科装置市場の拡大に伴い欧州及び中国を中心に売上げが増加したほか、産業分野においても、FA（ファクトリーオートメーション）分野の売上げが増加するなど、売上げは増加いたしました。

この結果、光半導体事業といたしましては、売上高は60,589百万円（前年同期比9.0%増）、営業利益は18,155百万円（前年同期比12.5%増）となりました。

〔画像計測機器事業〕

画像処理・計測装置は、X線ラインセンサカメラが食品検査用を中心に好調に推移いたしました。また、病理デジタルスライドスキャナも主に欧州において売上げに寄与いたしました。

この結果、画像計測機器事業といたしましては、売上高は17,214百万円（前年同期比5.3%増）、営業利益は3,544百万円（前年同期比0.2%増）となりました。

〔その他事業〕

その他事業の売上高は3,947百万円（前年同期比8.2%減）、営業利益は281百万円（前年同期比50.9%減）となりました。

(2) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における、現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は前連結会計年度末に比べて9,790百万円増加し、63,385百万円となりました。

営業活動による資金の増加は26,154百万円となりました。前年同期と比較しますと、1,994百万円の収入増となりました。

投資活動による資金の減少は13,198百万円となりました。前年同期は、4,186百万円の資金の増加でありました。

財務活動による資金の減少は5,707百万円となりました。前年同期と比較しますと、9,706百万円の支出減となりました。

2 【生産、受注及び販売の状況】

(1) 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)	
	金額（百万円）	前年同期比（％）
電子管事業	48,260	107.5
光半導体事業	60,108	108.1
画像計測機器事業	17,009	104.0
その他事業	2,806	79.9
合計	128,185	106.5

(注) 1 セグメント間の取引については相殺消去しております。

2 金額は販売価格によっております。

3 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 受注状況

当社グループは主に見込み生産を行っているため、該当事項はありません。

(3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)	
	金額（百万円）	前年同期比（％）
電子管事業	48,744	106.9
光半導体事業	60,589	109.0
画像計測機器事業	17,214	105.3
その他事業	3,947	91.8
合計	130,495	107.1

(注) 1 セグメント間の取引については相殺消去しております。

2 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

3 主要な販売先については、総販売実績に対する販売割合が10%以上の相手先はありません。

3 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社グループは、光センサ、光源及び画像技術等の基礎技術において、世界に通じるトップレベルの製品を造ることで光子工学（ホトニクス）の応用技術の開発とその応用技術を用いた新しい光産業の創成を目指しております。しかしながら、光と物質との相互作用は自然界における種々の現象の基礎ですが、そのほとんどの部分は学術的に未知未踏であるが故に、新規産業創成のための基礎技術を生み出す宝庫でもあります。このように無限の可能性のある光をキーテクノロジーとして、当社グループが長年にわたり培ってきた知識を基に新たな光技術を開発し、これを基礎として日本発の新産業を興すことで、産業・社会の発展に貢献することを基本理念としております。

(2) 経営戦略等

当社グループは、光についての新しい知識を創造し、光技術を発展させ、光産業を隆盛にし、以って全世界人類を真の健康にするため、バイオ、医療、情報、通信、エネルギー、物質、宇宙・天文、農業等の分野において、引き続き基礎研究・応用研究を推進してまいります。21世紀は企業にとって、真の新しい知識は利益の源泉であるとの認識のもと、日本発の新たな光産業の創成により、大量生産を視野に入れた技術開発、市場開発を積極的に行うことで収益を拡大させるとともに、投下資本に対する収益性の向上に努めることで、企業価値の増大を達成してまいります。

(3) 経営上の目標達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループは、持続的な成長に向けて、収益性の観点からは、事業別の売上高及び売上高営業利益率を重要視するとともに、効率性の観点からは、総資産当期純利益率（ROA：売上高利益率×総資産回転率）を重要視してまいります。

(4) 経営環境

当連結会計年度におけるわが国経済は、欧米の政治動向や東アジアにおける地政学的リスクの高まり等の懸念はありましたが、輸出に持ち直しの動きが見られ、企業収益が改善する中で設備投資も緩やかな増加基調をとるなど総じて回復基調で推移いたしました。

しかしながら、新興国経済の先行きや欧米の政治動向の不確実性など、今後の景気の見通しは依然として楽観できない状況にあると認識しております。

(5) 事業上及び財務上の対処すべき課題

当社グループが追求する光技術の応用範囲は世界規模で広がりを見せており、医用、産業分野などにおける最先端デバイスの製造、性能向上や新たな技術革新には、欠かすことのできない要素技術（Key Enabling Technology）となっております。

当社グループは、創業以来、事業の成長を牽引する光センサなどのコア技術を磨き、外部環境の変化や課題に迅速かつ機動的に対応してまいりました。変化の速度が増す医用、産業分野などにおきましては、今後も光技術が実現する高付加価値製品への期待は高く、当社グループのより一層の対応能力が求められております。当社グループは、このように高まる光技術の需要に応えるべく、国内外のグループ体制の一層の強化を図るとともに、要素技術の進化と光技術が切り拓く新たなアプリケーションの応用範囲の拡大に向けて、積極的な研究開発投資や設備投資を推し進めてまいります。

当社グループといたしましては、創業時のベンチャー精神を忘れることなく、競争力ある高付加価値製品を市場投入することで業容を拡大し、持続的かつ安定的な高収益体制を構築することで、産業・社会の発展に貢献してまいります。

4 【事業等のリスク】

当社グループの事業活動について、投資家の判断に重要な影響を及ぼす可能性がある主要なリスクは以下のとおりであります。ただし、以下に記載された項目以外の事態が生じた場合においても、当社グループの業績及び財務状況に大きな影響を及ぼす可能性があります。

なお、文中の将来に関する事項は、有価証券報告書提出日（平成29年12月22日）現在入手し得る情報に基づいて当社グループが判断したものであります。

（1）経済動向の変化について

世界経済及び日本経済は、米国、欧州、中国など世界各国の経済情勢の好不況の波、戦争やテロといった国際政治などの要因に大きく影響を受けます。このような経営環境の変化が、当社グループの予想を超えた場合、当社グループの業績に大きな影響を及ぼす可能性があります。

（2）電子管事業及び光半導体事業について

当社グループの電子管事業及び光半導体事業は、世界の主要な医用、産業用、分析器用、輸送機用メーカーに対して、それらのキーデバイスとしての光電子部品を供給しており、当社グループの中核をなす事業であります。当社グループは、継続的な新製品の投入並びに生産能力の増強により、新市場、市場占有率及び収益性の拡大に努めておりますが、競合他社との価格及び開発競争の激化などにより、電子管事業及び光半導体事業の収益率が著しく低下した場合には、当社グループの業績に大きな影響を及ぼす可能性があります。

（3）新技術、新製品の開発について

当社グループでは、光子工学について未知未踏の世界を拓くため、光に関する新技術及び新製品開発に必要な研究開発投資を継続的かつ積極的に行っており、売上高に占める研究開発費の割合は、比較的高い水準にあります。しかしながら、人類の光についての知識並びに技術は、まだ非常に小さく、他から学べるような問題ではなく、当社グループが解決していかなければならない課題であると認識しております。このような状況において、今後、当社グループが、光の本質に関する新たな知識を獲得できなかった、または、当社グループ以外によって、新たな光に関する技術的な発見があった場合には、当社グループは現在の市場さえも失う可能性とともに、当社グループの行っている研究開発投資は、必ずしも将来の売上高及び収益向上に結びつくとは限らず、将来の当社グループの業績及び成長見通しに大きな影響を及ぼす可能性があります。

（4）為替変動について

当社グループの主力製品であります光電子増倍管は、金額ベースで世界シェア9割強を握っており、また、光半導体素子でも、海外向けを中心として、医療機器向けに売上げを伸ばしております。当社グループの連結売上高に占める海外売上高の比率は平成27年9月期69.1%、平成28年9月期70.2%、平成29年9月期70.6%と高くなっております。このような状況の中で当社は、輸出の大部分を円建てで行うなどの為替変動リスクを回避する手段を講じて、安定した収益を得るべく努めていますが、急激な円高が起こった場合、または、円高傾向が長期にわたる場合には、海外の顧客による値引きの要請等の間接的な影響を受け、収益確保に影響を及ぼす可能性があります。

（5）地震等自然災害について

当社グループは、当社の本社、生産及び研究開発拠点が静岡県内に集中しており、予想される東海地震が発生した場合、製造ライン、研究開発施設及び情報システムの機能マヒにより、生産能力に重大な影響を与え、売上げの大幅な減少や施設の修復等に伴う多額の費用負担が発生することにより、当社グループの業績と財務状況に悪影響が及ぶ可能性があります。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

当社グループの研究開発活動は、「光の本質に関する研究及びその応用」をメインテーマとし、主に当社の中央研究所、筑波研究所及び各事業部において行っております。

光の世界は未だその本質すら解明されていないという、多くの可能性を秘めた分野であり、光の利用という観点からみても、光の広い波長領域のうち、ごく限られた一部しか利用することができていないのが現状であります。こうした中、当社の中央研究所及び筑波研究所においては、光についての基礎研究と光の利用に関する応用研究を進めており、また、各事業部においては、製品とその応用製品及びそれらを支える要素技術、製造技術、加工技術に関する開発を行っております。

当連結会計年度の研究開発費の総額は、11,776百万円であり、これを事業のセグメントで見ますと、電子管事業2,280百万円、光半導体事業3,201百万円、画像計測機器事業664百万円、その他事業201百万円及び各事業区分に配賦できない基礎的研究5,427百万円であります。

当連結会計年度における主要な研究開発の概要は次のとおりであります。

<電子管事業>

世界最小サイズの安定型高圧電源モジュール

光電子増倍管の動作には高電圧が必要なため、当社では、各種高圧電源も開発、製造しております。このうち高圧電源モジュールは、数ボルトの電圧を1,000ボルト程度まで昇圧させることができる小型のデバイスで、光電子増倍管とともに、医療用簡易検査機器や空港の手荷物検査機器等の様々な小型計測機器に採用されておりますが、近年、計測機器の小型化が進み、衛生管理、医療、環境計測などの分野で応用が広がり、さらなる小型化が求められております。このような中、当社は、構造設計及び回路設計の改良に加え独自の製造手法の確立により、従来品の半分以下のサイズでありながら同等の高性能を実現した、世界最小サイズの安定型高圧電源モジュールを開発いたしました。本製品は光電子増倍管用の高性能高圧電源モジュールとしては世界で初めて自動実装工程に対応しており、顧客の製造工程での作業時間を大幅に短縮できます。さらに、大量生産を可能としたことで、将来的な市場の拡大にも対応可能です。今後も、より小型、高電圧の電源モジュールの開発を進め、光電子増倍管のみならず幅広い用途への応用拡大に努めてまいります。

<光半導体事業>

ガス分析用赤外線検出素子

当社は、InAsSb（インジウムヒ素アンチモン）を材料とした赤外線検出素子において、感度波長域をこれまでの $8\mu\text{m}$ から $11\mu\text{m}$ に拡張し、高速、高感度でありながら常温動作する赤外線検出素子を開発いたしました。これは、当社で培った独自の薄膜結晶成長技術及びプロセス技術により実現したものです。これにより、 $10\mu\text{m}$ 付近の波長を吸収するアンモニア、オゾンなどの測定が可能となり、従来より注目されている窒素酸化物や硫黄酸化物などのより短い波長域に吸収のある大気汚染物質の計測とあわせて、本検出素子のみで対応可能となります。当社は、赤外線波長域の受光と発光の両素子を生産している世界でも数少ない企業です。本検出素子と赤外線波長域に発振波長をもつ当社製発光素子を組み合わせることにより、従来に比べ高速、高感度、高分解能なガス分析を可能とするものとして、さらなる需要の拡大が期待されます。

<画像計測機器事業>

LSIテストとのダイレクト接続が可能な半導体故障解析装置「iPHEMOS-DD」

近年、半導体の微細化・複雑化により、故障箇所の特定には、従来からの異物やプロセス不良によるショートや断線を検査する静止状態での解析に加え、半導体を動作状態に設定しながら回路の不良動作を解析するニーズが高まっております。動作状態での解析には、半導体に電気信号を入力し動作させるLSIテストの故障解析装置との接続が必要です。従来、その接続には長いケーブルを用いて対応しておりましたが、この方式では実際の動作状態と受信する解析情報にタイムラグがあるため、製造工程の検査と同じ環境での不良再現が難しく、正確な故障解析が困難でした。このような中、設計の最適化を進め、LSIテストとのダイレクト接続を可能とするとともに、動作状態での解析能力を大幅に向上したiPHEMOS-DDを開発いたしました。本装置は、動作状態での高精度な解析が必要なロジック系（注1）の半導体メーカーへの市場展開が期待できます。

<各事業区分に配賦できない基礎的研究>

医療の分野におきましては、がんの放射線治療における早期効果判定手法の確立に取り組んでおります。現在の放射線治療の効果判定手法では、生体を傷つけずにしかも早期に判定することは困難であるため、新たな判定手法の確立が望まれております。本研究（注2）におきましては、放射線照射ががん細胞のミトコンドリアを活性化することで、がん細胞の増殖を抑制する点に着目いたしました（注3）。そして、ミトコンドリアの活性化に比例してがん細胞への取り込み量が増加する当社開発のPET薬剤を用いて、放射線照射後のマウスのがん細胞におけるミトコンドリアの活性度をPETにより測定いたしました。この結果、外観上はがん組織の大きさに

変化がない段階でがん細胞にミトコンドリアの活性化が認められ、新開発のPET薬剤を用いたPET検査が、放射線治療の早期効果判定手法として有用であることが確認できました。

認知症患者は、健常者に比べて脳の糖代謝が低下しており、認知症の種別毎に特徴的な低下パターンを示すことが分かっております。そこで当社は、多数の健常者のPET脳糖代謝画像をデータベース化し、独自の統計解析法により認知症患者の脳糖代謝画像と比較する認知症診断支援システムを開発いたしました。本システムは浜松PET診断センター（注4）の「脳オブションコース」にて運用されており、これまでに約2,400例の実績を積み重ねてまいりました。今後は、本システムを他施設へも展開するため、国立大学法人浜松医科大学と浜松PET診断センターとの間で広域ネットワークを介した実証試験を行い、薬事承認に向けた準備を進めてまいります。

光の基礎研究分野におきましては、超高速量子シミュレーターの研究を進めております。物質内部において、原子や分子は互いに力を及ぼし合っており、半導体デバイスや超電導体、薬品等の性質を決定しています。量子シミュレーターとは、このメカニズムの解明のために、人工的な原子の集合体内で模擬実験を行う手法で、新機能材料や新たな医薬品等の開発にもつながることが期待されております。当社は、長年培ってまいりました空間光変調技術により、再現性の高い任意の光パターンを生成する技術を確立いたしました（注5）。これは、量子シミュレーターの実現に必要とされる光技術の一つであり、外部から与えた刺激が原子の集合体に及ぼす影響を調べるために用いられます。また、本技術は単なる基礎研究にとどまらず、新たな超解像度顕微鏡や三次元計測技術にも応用可能なため、さらなる研究展開が期待できます。

- （注） 1 半導体は情報を蓄積するメモリー系と演算等の処理を行うロジック系に大別され、従来、当社は主にメモリー系の半導体メーカーに装置を提供してまいりました。
- 2 本研究は、東海大学と共同で実施しております。
- 3 細胞は、軽度の傷害であれば自然に修復しますが、修復不可能な大きな傷害の場合、アポトーシスと呼ばれる自発的な自然死に至り、がん化を防ぐことが知られています。放射線照射は、ミトコンドリアを活性化させることでこのアポトーシスを誘導し、がん細胞の増殖を抑制します。
- 4 浜松PET診断センターは、当社が設立した一般財団法人浜松光医学財団が運営しております。
- 5 本成果は、日本学術振興会の科学研究費助成事業（特別推進研究）「アト秒精度の超高速コヒーレント制御を用いた量子多体ダイナミクスの探求」のもと、自然科学研究機構分子科学研究所との共同研究より得られたものです。

7【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。この連結財務諸表の作成にあたり、採用している重要な会計方針は「第5 経理の状況」の「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載されているとおりであります。

当社グループの連結財務諸表の作成にあたり、連結会計年度末における資産、負債及び収益、費用の計上、偶発債務の開示に関連して、見積りや仮定を使用する必要があります。これらの見積りや仮定は、その時点で入手可能な情報に基づいた合理的と考えられるさまざまな要因を考慮したうえで行っておりますが、当社グループを取り巻く環境や状況の変化により、これらの見積りや仮定が実際の結果と異なる可能性がありますのでご留意下さい。

（1）経営成績の概要

当連結会計年度の業績につきましては、国内売上げ、海外売上げともに増加いたしました結果、売上高は130,495百万円と前年同期に比べ8,643百万円（7.1%）の増加となりました。一方、利益面につきましても同様に、営業利益は22,849百万円と前年同期に比べ2,305百万円（11.2%）増加し、経常利益は24,037百万円と前年同期に比べ3,986百万円（19.9%）増加し、親会社株主に帰属する当期純利益につきましても17,777百万円と前年同期に比べ3,357百万円（23.3%）の増加となりました。

（2）売上高

光電子増倍管は、医用分野におきまして、血液分析などの検体検査装置向けが、その高感度、低ノイズ、高速応答特性を評価されて海外を中心に売上げが増加いたしました。また、計測分野におきまして、高温や衝撃、振動などへの耐性に優れた油田探査装置向けの売上げが増加いたしました。さらに、高エネルギー物理学実験等の学術向けも売上げを伸ばしました結果、光電子増倍管の売上げは増加いたしました。

イメージ機器及び光源は、産業分野におきまして、非破壊検査用のマイクロフォーカスX線源の売上げが海外を中心に好調に推移いたしました。また、医用分野におきまして、X線画像を可視像に変換するX線シンチレータの売上げが増加いたしました。さらに、環境分析向けの重水素ランプの売上げも堅調に推移いたしました結果、イメージ機器及び光源の売上げは増加いたしました。

以上の結果、光電子増倍管、イメージ機器及び光源をあわせました電子管事業といたしましては、売上高は48,744百万円（前年同期比6.9%増）となりました。

光半導体素子は、医用分野におきまして、フラットパネルセンサがその高性能・高品質を評価され、歯科装置市場の拡大に伴い欧州及び中国を中心に売上げを大きく伸ばしました。また、産業分野では、産業用ロボット等の制御などFA（ファクトリーオートメーション）分野においてフォトICやLEDの売上げが国内を中心に増加したほか、半導体製造・検査装置向けのイメージセンサの売上げも好調に推移いたしました結果、光半導体素子の売上げは増加いたしました。

この結果、光半導体事業といたしましては、売上高は60,589百万円（前年同期比9.0%増）となりました。

画像処理・計測装置は、半導体故障解析装置が、海外売上げは堅調であったものの国内における半導体設備投資抑制の影響を受け、売上げが減少いたしました。しかしながら、X線ラインセンサカメラの売上げが、長寿命タイプの新製品の投入もあり食品検査用を中心に好調に推移いたしました。また、病理デジタルスライドスキャナも顧客ニーズに応えた新製品が主に欧州において売上げに寄与いたしました結果、画像処理・計測装置の売上げは増加いたしました。

この結果、画像計測機器事業といたしましては、売上高は17,214百万円（前年同期比5.3%増）となりました。

その他事業の売上高は3,947百万円（前年同期比8.2%減）となりました。

(3) 為替変動の影響

売上高に係る為替変動の影響額は、主として海外連結子会社の財務諸表を円貨に換算する為替レートの差により発生しております。当連結会計年度における対米ドルの期中平均レートは前年同期に比べ50銭の円高となり163百万円減収の影響を受けております。対ユーロの期中平均レートは前年同期に比べ1円11銭の円高となり197百万円減収の影響を受けております。また、対中国元の期中平均レートは前年同期に比べ2円6銭の円高となり1,256百万円減収の影響を受けております。

(4) 売上原価、販売費及び一般管理費

売上原価は、前年同期比4,862百万円（8.0%）増加し65,670百万円となり、売上総利益は前年同期比3,780百万円（6.2%）増加し64,825百万円となりました。また、売上総利益率につきましては、電子管事業が前年同期比0.3%、光半導体事業が前年同期比0.3%上昇したものの、画像計測機器事業が前年同期比1.5%低下したことから、前年同期比0.4%低下し49.7%となりました。

販売費及び一般管理費は、前年同期比1,474百万円（3.6%）増加し41,975百万円となりました。これは人件費が前年同期比795百万円（5.2%）増加したこと及び支払手数料が前年同期比133百万円（3.7%）増加したことなどによるものであります。なお、研究開発費につきましては、前年同期比97百万円（0.8%）減少し、売上高に対する比率は9.0%となりました。

(5) 営業利益

営業利益は、前年同期比2,305百万円（11.2%）増加し22,849百万円となりました。電子管事業は、光電子増倍管をはじめとして、売上げが増加したことに伴い、売上総利益が前年同期比1,906百万円増加したことにより、営業利益は前年同期比1,650百万円（10.8%）増加し16,992百万円となりました。光半導体事業は、フラットパネルセンサの売上げが増加したことなどに伴い、売上総利益が前年同期比2,482百万円増加したことにより、営業利益は前年同期比2,014百万円（12.5%）増加し18,155百万円となりました。画像計測機器事業は、X線ラインセンサカメラの売上げが増加したことに伴い、売上総利益が前年同期比181百万円増加したことにより、営業利益は前年同期比5百万円（0.2%）増加し3,544百万円となりました。その他事業は、売上高の減少に伴い、営業利益は前年同期比291百万円（50.9%）減少し281百万円となりました。

(6) 営業外損益

営業外損益は、前年同期は493百万円の損失計上でありましたが、当連結会計年度は1,188百万円の利益計上となりました。これは、前年同期の為替差損1,115百万円が、当連結会計年度は為替差益495百万円に転じたことによるものであります。なお、受取利息の減少などにより金融収支は48百万円の収入減となりました。

(7) 特別損益

特別損失は、前年同期比81百万円減少し701百万円となりました。これは、固定資産除却損が412百万円増加したものの、固定資産圧縮損が500百万円減少したことによるものであります。なお、固定資産圧縮損の減少につきましては、これに対応する補助金収入も567百万円減少しております。

(8) 親会社株主に帰属する当期純利益

以上のことから、税金等調整前当期純利益は前年同期比3,489百万円（17.4%）増加し23,570百万円となりました。また、法人税等の負担率が、前年同期の27.95%と比較して、当連結会計年度は24.30%と3.65%低下しております。この結果、親会社株主に帰属する当期純利益は前年同期比3,357百万円（23.3%）増加し17,777百万円となりました。

(9) 財政状態

流動資産の主な変動は、現金及び預金が9,399百万円、受取手形及び売掛金が5,692百万円それぞれ増加したことなどから、流動資産は前連結会計年度末に比べ16,325百万円増加しております。

固定資産の主な変動は、建物及び構築物の増加などにより、有形固定資産が3,999百万円増加したことなどから、固定資産は前連結会計年度末に比べ5,705百万円増加しております。

この結果、当連結会計年度末の総資産は、前連結会計年度末に比べ22,030百万円増加し、239,331百万円となりました。

流動負債の主な変動は、1年内返済予定の長期借入金が2,975百万円、未払法人税等が1,498百万円それぞれ増加したことなどから、流動負債は前連結会計年度末に比べ8,182百万円増加しております。

固定負債の主な変動は、長期借入金が3,160百万円減少したことなどから、固定負債は前連結会計年度末に比べ3,993百万円減少しております。

この結果、当連結会計年度末の負債合計は前連結会計年度末に比べ4,189百万円増加し、51,773百万円となりました。

純資産の主な変動は、親会社株主に帰属する当期純利益の計上などにより利益剰余金が12,419百万円増加したほか、為替換算調整勘定が4,132百万円増加したことなどから、当連結会計年度末の純資産は前連結会計年度末に比べ17,841百万円増加し、187,558百万円となりました。

(10) キャッシュ・フロー

当連結会計年度末の現金及び現金同等物（以下「資金」という。）の残高は、前連結会計年度末に比べ9,790百万円増加し、63,385百万円となりました。

当連結会計年度のキャッシュ・フローの状況を、前年同期と比較しますと次のとおりであります。

営業活動によるキャッシュ・フローでは、前年同期に比べ1,994百万円多い26,154百万円の資金を得ております。これは主として、税金等調整前当期純利益が3,489百万円増加したこと及び法人税等の支払額が1,296百万円減少したことなどにより、収入増となっております。

投資活動によるキャッシュ・フローでは、前年同期は、自己株式の取得に伴う非キャッシュである3ヶ月超の定期預金からの払戻しなどにより、4,186百万円の資金増でありましたが、当連結会計年度は、有形固定資産取得による支出などにより、13,198百万円の資金減となっております。

財務活動によるキャッシュ・フローでは、前年同期に比べ9,706百万円少ない5,707百万円の資金を支出しております。これは主として、自己株式の取得による支出が9,999百万円減少したことなどにより、支出減となっております。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度は、生産能力の拡大と開発力強化などを目的とした投資を中心に、13,572百万円の設備投資（有形固定資産受入ベース）を実施しております。これらの所要資金は、主として自己資金により充当しております。

主なセグメントごとの設備投資の内容は次のとおりであります。

（1）電子管事業

主に当社において、光電子増倍管の生産能力拡大及び開発力強化を目的とした建物改修のための投資を行いました。また、光電子増倍管、イメージ機器及び光源の製造設備及び研究開発用設備の更新、拡充を中心に、電子管事業としては2,650百万円の設備投資となりました。

（2）光半導体事業

主に当社において、光半導体素子の生産能力拡大を目的とした建物新築のための投資を行いました。また、光半導体素子の製造設備及び研究開発用設備の更新、拡充を中心に、光半導体事業としては5,579百万円の設備投資となりました。

（3）画像計測機器事業

主に当社において、画像処理・計測装置の製造設備及び研究開発用設備の更新、拡充を中心に、画像計測機器事業としては784百万円の設備投資となりました。

なお、当連結会計年度において、重要な設備の除却、売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

（1）提出会社

（平成29年9月30日）

事業所名 （所在地）	セグメント の名称	設備の内容	土地面積 （㎡）	帳簿価額（百万円）					従業員数 （名）
				土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	その他	合計	
本社工場 （静岡県浜松市東区）	光半導体	光半導体素子の製造 及び研究開発設備	(12,529) 55,953	1,966	4,847	2,425	565	9,805	735
三家工場 （静岡県磐田市）	光半導体	光半導体素子の製造 設備	(1,403) 24,885	754	925	572	55	2,307	244
新貝工場 （静岡県浜松市南区）	光半導体	光半導体素子の製造 設備	39,147	1,603	3,500	1,056	125	6,287	147
豊岡製作所 （静岡県磐田市）	電子管	光電子増倍管、イメ ージ機器及び光源の 製造及び研究開発設 備	(40,392) 91,857	1,184	10,510	3,468	572	15,737	1,051
常光製作所 （静岡県浜松市東区）	画像計測機 器	画像処理・計測装置 の製造及び研究開発 設備	(1,834) 25,753	1,690	1,262	47	673	3,674	418
都田製作所 （静岡県浜松市北区）	その他	半導体レーザの製造 及び研究開発設備	76,636	1,076	304	174	62	1,617	109
中央研究所 （静岡県浜松市 浜北区）	全社	研究開発用設備	166,236	4,402	2,408	310	294	7,416	354
産業開発研究所 （静岡県浜松市西区）	全社	研究開発用設備	174,584	572	1,988	298	257	3,117	28

（注）1 帳簿価額には建設仮勘定の金額を含んでおりません。

2 土地の面積欄の（ ）内は外書きで連結会社以外から賃借中のものです。

3 上記のほか、関係会社及び外注先などへの貸与設備があり、関係会社のうち、主な貸与先は高丘電子㈱及び㈱光素であります。

(2) 国内子会社

(平成29年9月30日)

会社名	所在地	セグメント の名称	設備の内容	土地面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)					従業員数 (名)
					土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	その他	合計	
㈱光素	静岡県 磐田市	電子管	光源の製造設 備	(4,793) 8,255	132	563	26	3	726	91
高丘電子㈱	静岡県 浜松市 中区	電子管	光電子増倍管 の製造設備	(1,024) 7,224	477	317	19	4	818	105
浜松電子プレス ㈱	静岡県 磐田市	電子管	光電子増倍管 用部品等の製 造設備	(3,015) 9,552	269	201	105	26	603	39
㈱磐田グランド ホテル	静岡県 磐田市	その他	宿泊設備	(7,743) 18,639	551	75	4	26	657	51

(注) 1 帳簿価額には建設仮勘定の金額を含んでおりません。

2 土地の面積欄の () 内は外書きで連結会社以外から賃借中のものです。

(3) 在外子会社

(平成29年9月30日)

会社名	所在地	セグメントの 名称	設備の内容	土地面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)					従業員数 (名)
					土地	建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	その他	合計	
ホトニクス・マネー ジメント・コーポ	米国	全社	事務所用建物他	34,036	151	212	—	1	364	4
ハママツ・コーポ レーション	米国	電子管、光半 導体、画像計 測機器	光センサモジ ュールの製造設備	17,758	67	900	45	279	1,292	242
ハママツ・ホトニ クス・ドイチュラン ト・ゲー・エム・ベ ー・ハー	独国	電子管、光半 導体、画像計 測機器	事務所用建物他	13,873	184	537	1	148	871	78
ハママツ・ホトニ クス・フランス・エ ス・ア・エール・エ ル	仏国	電子管、光半 導体、画像計 測機器	事務所用建物他	2,588	87	322	7	58	476	62
ハママツ・ホトニ クス・ユー・ケイ・リ ミテッド	英国	電子管、光半 導体、画像計 測機器	事務所用建物他	2,150	104	73	23	17	218	42
北京浜松光子技術 股份有限公司	中国	電子管、その 他	光電子増倍管等 の製造設備	—	—	1,192	455	381	2,029	493

(注) 1 帳簿価額には建設仮勘定の金額を含んでおりません。

2 ホトニクス・マネージメント・コーポは、ハママツ・コーポレーションに対し、事務所用建物を賃貸しております。

3【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

有形固定資産の設備計画

セグメントの名称	平成29年9月末計画金額		設備の内容	着工年月	完了予定年月
	予算金額 (百万円)	既支払額 (百万円)			
電子管事業	9,100	—	電子管製品の研究開発及び製造用工場、光電子増倍管、イメージ機器及び光源の製造用設備	平成29年10月	平成32年3月
光半導体事業	5,700	—	光半導体素子の製造用設備	平成29年10月	平成30年9月
画像計測機器事業	1,200	—	画像処理・計測装置の製造用設備	平成29年10月	平成30年9月
その他事業	400	—	半導体レーザーの製造用設備	平成29年10月	平成30年9月
全社	7,500	3,102	化合物半導体素子の研究開発及び製造用工場、基礎研究開発用設備	平成28年10月	平成30年9月
合計	23,900	3,102	—	—	—

(注) 上記設備計画に伴う今後の所要資金23,900百万円につきましては、主として自己資金により充当する予定であります。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	500,000,000
計	500,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数（株） （平成29年9月30日）	提出日現在 発行数（株） （平成29年12月22日）	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	167,529,968	167,529,968	東京証券取引所 市場第一部	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
計	167,529,968	167,529,968	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成27年4月1日 (注)	83,764	167,529	—	34,928	—	34,636

(注) 株式分割 (1:2) によるものであります。

(6) 【所有者別状況】

(平成29年9月30日現在)

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満 株式の状況 （株）
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	－	65	34	165	463	17	23, 004	23, 748	－
所有株式数 (単元)	－	431, 034	19, 006	162, 793	589, 748	2, 066	470, 289	1, 674, 936	36, 368
所有株式数の 割合(%)	－	25. 73	1. 14	9. 72	35. 21	0. 12	28. 08	100. 00	－

(注) 1 平成29年9月30日現在の自己株式は9,945,281株であり、このうち9,945,200株(99,452単元)は「個人その他」の欄に、81株は「単元未満株式の状況」の欄にそれぞれ表示してあります。

2 「その他の法人」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が4単元含まれております。

(7) 【大株主の状況】

(平成29年9月30日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株 式総数に 対する所 有株式数 の割合 (%)
日本マスタートラスト信託銀行 株式会社 (信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	9,114	5.44
トヨタ自動車株式会社	愛知県豊田市トヨタ町1番地	8,400	5.01
ステート ストリート バンク アンド トラスト カンパニー (常任代理人 香港上海銀行東 京支店 カストディ業務部)	ONE LINCOLN STREET, BOSTON MA USA 02111 (東京都中央区日本橋3丁目11-1)	7,136	4.26
日本トラスティ・サービス信託 銀行株式会社 (信託口9)	東京都中央区晴海1丁目8-11	6,912	4.13
ジェーピー モルガン チェー ス バンク 380055 (常任代理人 株式会社みずほ 銀行決済営業部)	270 PARK AVENUE, NEW YORK, NY 10017, UNITED STATES OF AMERICA (東京都港区港南2丁目15-1 品川インターシティA棟)	6,467	3.86
日本トラスティ・サービス信託 銀行株式会社 (信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-11	5,607	3.35
浜松ホトニクス従業員持株会	静岡県浜松市中区砂山町325-6	4,995	2.98
野村信託銀行株式会社 (投信 口)	東京都千代田区大手町2丁目2-2	2,872	1.71
日本トラスティ・サービス信託 銀行株式会社 (信託口5)	東京都中央区晴海1丁目8-11	2,749	1.64
晝馬 明	静岡県浜松市西区	2,400	1.43
計	—	56,654	33.82

(注) 1 上記のほか当社所有の自己株式9,945千株 (5.94%) があります。

- 2 キャピタル・リサーチ・アンド・マネージメント・カンパニー及びその共同保有者5社から、平成28年12月2日付（報告義務発生日平成28年11月25日）の大量保有報告書（変更報告書）が提出され、平成28年11月25日現在で、それぞれ以下のとおり株式を保有している旨の報告を受けておりますが、当社として期末時点における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。
- なお、大量保有報告書（変更報告書）の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等 保有割合 (%)
キャピタル・リサーチ・アンド・マネージメント・カンパニー	アメリカ合衆国カリフォルニア州、ロスアンジェルス、サウスホープ・ストリート333	11,883	7.09
キャピタル・ガーディアン・トラスト・カンパニー	アメリカ合衆国カリフォルニア州、ロスアンジェルス、サウスホープ・ストリート333	10,281	6.14
キャピタル・インターナショナル・リミテッド	英国SW1X 7GG、ロンドン、グロスヴェノー・プレイス40	666	0.40
キャピタル・インターナショナル・インク	アメリカ合衆国カリフォルニア州90025、ロスアンジェルス、サンタ・モニカ通り11100、15階	501	0.30
キャピタル・インターナショナル・エス・エイ・アール・エル	スイス国、ジュネーヴ1201、プラス・デ・ベルグ3	390	0.23
キャピタル・インターナショナル株式会社	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号 明治安田生命ビル14階	3,295	1.97

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

(平成29年9月30日現在)

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 9,945,200	—	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
完全議決権株式 (その他)	普通株式 157,548,400	1,575,484	同上
単元未満株式	普通株式 36,368	—	—
発行済株式総数	167,529,968	—	—
総株主の議決権	—	1,575,484	—

(注) 1 完全議決権株式 (その他) 欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が400株 (議決権4個) 含まれております。

2 単元未満株式欄の普通株式には、当社所有の自己株式81株が含まれております。

② 【自己株式等】

(平成29年9月30日現在)

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数 (株)	他人名義所有 株式数 (株)	所有株式数の 合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有株 式数の割合 (%)
(自己保有株式) 浜松ホトニクス株式会社	静岡県浜松市東区市野町 1126番地の1	9,945,200	—	9,945,200	5.94
計	—	9,945,200	—	9,945,200	5.94

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号に該当する普通株式の取得及び会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (百万円)
取締役会 (平成29年11月13日) での決議状況 (取得期間 平成29年11月14日～平成30年3月23日)	3,000,000	10,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	—	—
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	—
当事業年度の末日現在の未行使割合 (%)	—	—
当期間における取得自己株式	514,600	2,031
提出日現在の未行使割合 (%)	82.8	79.7

(注) 当期間における取得自己株式には、平成29年12月1日から有価証券報告書提出日までの取締役会決議に基づく取得による株式は含まれておりません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (百万円)
当事業年度における取得自己株式	128	0
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、平成29年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (百万円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (百万円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (—)	—	—	—	—
保有自己株式数	9,945,281	—	10,459,881	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、平成29年12月1日から有価証券報告書提出日までの取締役会決議に基づく取得及び単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

3【配当政策】

当社は、株主の皆様への利益還元策といたしましては、配当による成果の配分を第一に考えております。そのため当社は、長期的な展望に基づく企業収益力の充実・強化を図ることにより1株当たり利益の継続的な増加に努め、親会社株主に帰属する当期純利益に対する配当性向30%を目処に、配当の安定的な増加に努めることを配当政策の基本方針としております。

一方で、光のリーディングカンパニーとして高い技術力による競争力を維持するため、長期的な企業価値の拡大に向けた研究開発及び光産業創成のための成長投資は必要不可欠であると考えております。そして、そのための研究開発投資や設備投資に備えた一定水準を自己資金で確保しておくことが重要であると認識しております。加えて、地震等の自然災害に備えた自己資金等も勘案して、当社は内部留保を高水準に維持しておりますが、これらの資金は将来の競争力の高い製品の開発のための事業投資により、さらなる企業価値の向上に寄与するものと認識しております。

当事業年度の配当につきましては、期末配当金を1株当たり17円実施いたしました。これにより、当期の年間配当金は34円（うち中間配当金17円）となっております。

当社は、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としており、これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当社は、取締役会の決議によって、毎年3月31日を基準日として、中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額（円）
平成29年5月8日 取締役会決議	2,678	17
平成29年12月22日 定時株主総会決議	2,678	17

4【株価の推移】

（１）【最近５年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第66期	第67期	第68期	第69期	第70期
決算年月	平成25年9月	平成26年9月	平成27年9月	平成28年9月	平成29年9月
最高（円）	4,110	5,300	7,440 □3,940	3,495	3,615
最低（円）	2,532	3,430	4,485 □2,571	2,467	2,768

（注）１ 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

２ □印は、株式分割（平成27年4月1日、1：2）による権利落後の最高・最低株価を示しております。

（２）【最近６月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年 4月	5月	6月	7月	8月	9月
最高（円）	3,300	3,575	3,615	3,555	3,585	3,610
最低（円）	3,035	3,280	3,335	3,410	3,310	3,315

（注）最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 【役員の状況】

男性15名 女性1名 （役員のうち女性の比率6.3%）

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
代表取締役 社長		晝馬 明	昭和31年11月10日生	昭和59年10月 平成21年12月 平成22年2月 平成22年12月 平成23年5月 平成23年8月 平成25年4月 平成26年8月	当社入社 代表取締役社長就任（現任） ホトニクス・マネージメント・コー ポ取締役社長就任（現任） 学校法人光産業創成大学院大学理事 長就任（現任） 財団法人光科学技術研究振興財団 （現 公益財団法人光科学技術研究 振興財団）理事長就任（現任） 浜松光子学商貿（中国）有限公司董 事長就任（現任） 一般財団法人浜松光医学財団理事長 就任（現任） ハママツ・コーポレーション取締役 就任（現任）	平成29年 12月から 2年	2,400
代表取締役 副社長		竹内 純一	昭和17年9月12日生	昭和33年4月 昭和63年10月 平成元年12月 平成5年12月 平成15年12月 平成22年4月 平成23年12月 平成24年12月 平成29年12月	当社入社 電子管第一事業部長 取締役就任 常務取締役就任 電子管事業部長 北京浜松光子技術股份有限公司董 事長就任（現任） 専務取締役就任 代表取締役専務取締役就任 代表取締役副社長就任（現任）	平成29年 12月から 2年	211
代表取締役 専務取締役	固体事業部長 兼レーザ事業 推進部長	山本 晃永	昭和20年10月20日生	昭和45年3月 昭和60年1月 昭和60年12月 昭和62年12月 平成16年12月 平成17年7月 平成29年12月	当社入社 固体事業部長（現任） 取締役就任 常務取締役就任 専務取締役就任 代表取締役専務取締役就任（現任） レーザ事業推進部長就任（現任）	平成29年 12月から 2年	94
常務取締役	電子管事業部 長	鈴木 賢次	昭和23年3月22日生	昭和41年3月 平成16年3月 平成20年4月 平成21年12月 平成24年12月 平成26年12月 平成29年12月	当社入社 電子管事業部第5製造部長 電子管事業部電子管技術部長 取締役就任 電子管事業部長代理（現 電子管副 事業部長） 常務取締役就任（現任） 台湾浜松光子学有限公司董事長就任 （現任） 電子管事業部長（現任）	平成29年 12月から 2年	81
常務取締役	中央研究所長	原 勉	昭和27年3月22日生	昭和54年6月 平成18年10月 平成21年12月 平成22年11月 平成24年12月	当社入社 中央研究所長代理 取締役就任 中央研究所長（現任） 常務取締役就任（現任）	平成29年 12月から 2年	10
常務取締役	管理本部長	吉田 堅司	昭和23年12月15日生	昭和46年3月 昭和63年5月 平成9年6月 平成22年12月 平成24年12月 平成25年12月 平成29年10月	当社入社 ハママツ・ホトニクス・ユー・ケ イ・リミテッド取締役社長 社長室長 取締役就任 常務取締役就任（現任） 事務部門統括 管理本部長（現任）	平成29年 12月から 2年	96
取締役	営業本部副本 部長兼国内統 括部長	鳥山 尚史	昭和33年3月11日生	昭和56年3月 平成24年10月 平成26年2月 平成27年12月	当社入社 電子管営業推進部長 国内統括部長（現任） 取締役就任（現任） 営業本部副本部長（現任）	平成29年 12月から 2年	8

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役	管理部長	森 和 彦	昭和31年12月11日生	昭和54年4月 平成21年7月 平成23年7月 平成24年12月 平成29年12月	株式会社協和銀行（現 株式会社りそな銀行）入行 株式会社りそな銀行渋谷エリア営業第一部長 当社出向、財務部長 常勤監査役就任 取締役就任（現任） 管理部長（現任）	平成29年 12月から 2年	1
取締役	システム事業部長	丸 野 正	昭和35年10月6日生	昭和58年4月 平成20年10月 平成26年10月 平成28年10月 平成29年12月	当社入社 システム事業部第一設計部長 システム設計部長 システム事業部長代理（現 システム副事業部長） 取締役就任（現任） システム事業部長（現任）	平成29年 12月から 2年	5
取締役	固体副事業部長	鈴木 貴 幸	昭和36年10月8日生	平成元年7月 平成28年10月 平成29年10月 平成29年12月	当社入社 固体事業部第3製造部長 固体副事業部長（現任） 取締役就任（現任）	平成29年 12月から 2年	1
取締役		小館 香椎子	昭和16年1月18日生	平成4年4月 平成20年1月 平成21年4月 平成21年9月 平成24年4月 平成27年12月 平成29年4月	日本女子大学理学部教授 株式会社Photonic System Solutions代表取締役就任 日本女子大学名誉教授（現任） 独立行政法人（現国立研究開発法人）科学技術振興機構 男女共同参画 主監 電気通信大学特任教授（現任） 当社取締役就任（現任） 株式会社Photonic System Solutions取締役会長就任（現任）	平成29年 12月から 2年	0
取締役		鯉 渕 健	昭和41年11月26日生	平成5年4月 平成28年1月 平成29年4月 平成29年12月	トヨタ自動車株式会社入社 同社先進安全先行開発部長（現任） 同社先進技術開発カンパニー常務理事就任（現任） 当社取締役就任（現任）	平成29年 12月から 2年	—
常勤監査役		水 島 廣	昭和24年7月28日生	昭和47年3月 平成20年4月 平成26年7月 平成26年12月	当社入社 システム事業部長代理 退社 常勤監査役就任（現任）	平成28年 12月から 4年	38
常勤監査役		宇 津 山 晃	昭和35年6月12日生	昭和58年4月 平成18年7月 平成29年12月	当社入社 知的財産部長 常勤監査役就任（現任）	平成29年 12月から 3年	5
監査役		榎 祐 治	昭和33年1月31日生	昭和56年4月 平成20年1月 平成24年12月 平成27年4月	トヨタ自動車販売株式会社（現 トヨタ自動車株式会社）入社 同社経理部主査 当社監査役就任（現任） 同社常務役員就任（現任）	平成28年 12月から 4年	—
監査役		佐 野 三 郎	昭和24年5月24日生	昭和48年4月 平成16年5月 平成20年6月 平成22年6月 平成25年6月 平成28年6月 平成28年12月	株式会社東京銀行（現 株式会社三菱東京UFJ銀行）入行 株式会社東京三菱銀行（現 株式会社三菱東京UFJ銀行）常務執行役員 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ代表取締役専務取締役東銀リース株式会社代表取締役社長 同社代表取締役会長 三菱プレジジョン株式会社社外監査役（現任） 当社監査役就任（現任）	平成28年 12月から 4年	—
計							2,956

（注） 1 取締役 小館香椎子及び取締役 鯉渕健は、社外取締役であります。

2 監査役 榎祐治及び監査役 佐野三郎は、社外監査役であります。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

当社は、当社グループの企業価値向上に資すべき良き企業文化は今後も維持しつつ、実効的なコーポレート・ガバナンスを実現し、会社の意思決定の透明性・健全性を確保し、迅速・適切な意思決定により持続的な成長と中長期的な企業価値を実現する。

また、当社の企業倫理及びコンプライアンスに関する基本的な考え方は次のとおりであります。

我が国が世界で生き残るには、人類にとって未知未踏の領域を追求することで新しい知識を得て、新しい産業を生み出すことが重要である。新しく産業を創造するためには、人類にとって未知未踏の分野は無限にあることを認識しなければならない。

そして、社員一人ひとりが自分にしかできないことを見つけ出し、当社が取組む光産業創成に向けての知識、ニーズ、競争力のある技術の開発を行うとともに、何が真に正しいのかを全身全霊で求める姿勢が必要である。

更に、新しい産業を興すために社外関係者（ステークホルダー）へその重要性を十分説明して正しく理解していただく必要がある。

企業は従業員の行動に基づき行われるものである。一人ひとりが責任・職務・認識を持って、日々の仕事を通じて研鑽し、新しい知識の吸収、情報の正しい伝達により未知未踏の領域を追求するとともに、人権を尊重し、関係法令、国際ルール及びその精神を遵守することは勿論のこと、社会の一員として真に正しい行動をする企業風土を醸成しなければならない。また、暴力団、暴力団関係企業、総会屋など暴力、威力と詐欺的手法を駆使して経済的利益を追求し、または社会秩序や社会の安全に脅威を与える集団又は個人等とは一切の関係を拒絶し、毅然とした態度で対応することが必要である。当社は、一人ひとりの社員がこのような明確で高い意識を持つことにより、健全で信頼される企業として成長・発展しなければならない。

当社は、こうした一人ひとりの社員の高い倫理観の維持と光技術を通して新しい産業を創成することにより、社会、人類に貢献することを目指す。

企業統治の体制

当社は監査役制度を採用しており、会社の機関として会社法に規定する取締役会及び監査役会を設置しております。当社は社外取締役及び社外監査役を選任することにより、経営監督機能の充実を図るとともに、内部監査体制を充実させることで、必要にして適切なコーポレート・ガバナンス体制を構築しております。

①会社の機関の内容及び内部統制システムの整備の状況等

イ．会社の機関の基本説明

《取締役及び取締役会》

当社は取締役会（提出日現在12名で構成、うち社外取締役2名を含む）を経営の基本方針及び経営に関する重要事項の決定並びに業務執行状況の監視・監督を行う機関として位置付けております。取締役会は、毎月1回の定例開催と、機動的な臨時開催を行うことで、迅速な意思決定、透明性の確保を図ることとし、十分な協議により適正、的確な意思決定を行い、業務執行の状況を監督しております。

《監査役、監査役会及び内部監査体制》

当社は監査役制度を採用しており、監査役会（当事業年度6回開催）は、提出日現在監査役4名のうち2名を社外監査役とした監査体制としております。各監査役は、監査役会で定めた監査の方針及び実施計画に従い、毎月開催される取締役会及び社内の重要な会議に出席して経営の執行状況を把握するほか、経営執行部門から業務執行状況を聴取することで、取締役の職務執行の監査を行っております。また、会計監査人とは、定期的に、あるいは必要に応じて随時会合（当事業年度13回開催）を持つことで、情報交換を実施しております。

内部監査につきましては、各部門、グループ各社の業務プロセス及び業務全般について、法令並びに社内規定に則り適正かつ効率的に行われていることを監査する目的で、内部監査部門(1名)を設置しております。内部監査部門は社長が承認した年間計画に基づき、必要に応じて常勤監査役並びに会計監査人と意見交換を行うことで、監査効率の向上に努めております。その監査結果については、社長及び常務会並びに関係部門に報告を行っております。

《 社外取締役及び社外監査役 》

当社には社外取締役が2名、社外監査役が2名おります。社外取締役には、取締役会において業務執行より独立した立場から意思決定や監督を行うにあたり、その専門知識を当社の経営に活かすことを期待しております。また、社外監査役には、独立的な立場から意見を求めることで、より適正な監査の実現を図ることを期待しております。

社外取締役 小館香椎子氏は、日本女子大学の名誉教授であり、当社と同大学との間で営業取引がありますが、取引高は僅少であり独立性に影響を及ぼすような重要性がないことから、一般株主と利益相反が生じる恐れはありません。

社外取締役 鯉渕健氏は、トヨタ自動車株式会社の常務理事であり、同社は当社株式の5.0%を所有しております。当社と同社との間で営業取引がありますが、取引高は僅少であり独立性に影響を及ぼすような重要性がないことから、実質上一般株主と利益相反が生じる恐れはありません。

社外監査役 横祐治氏は、トヨタ自動車株式会社の常務役員であり、同社は当社株式の5.0%を所有しております。当社と同社との間で営業取引がありますが、取引高は僅少であり独立性に影響を及ぼすような重要性がないことから、実質上一般株主と利益相反が生じる恐れはありません。

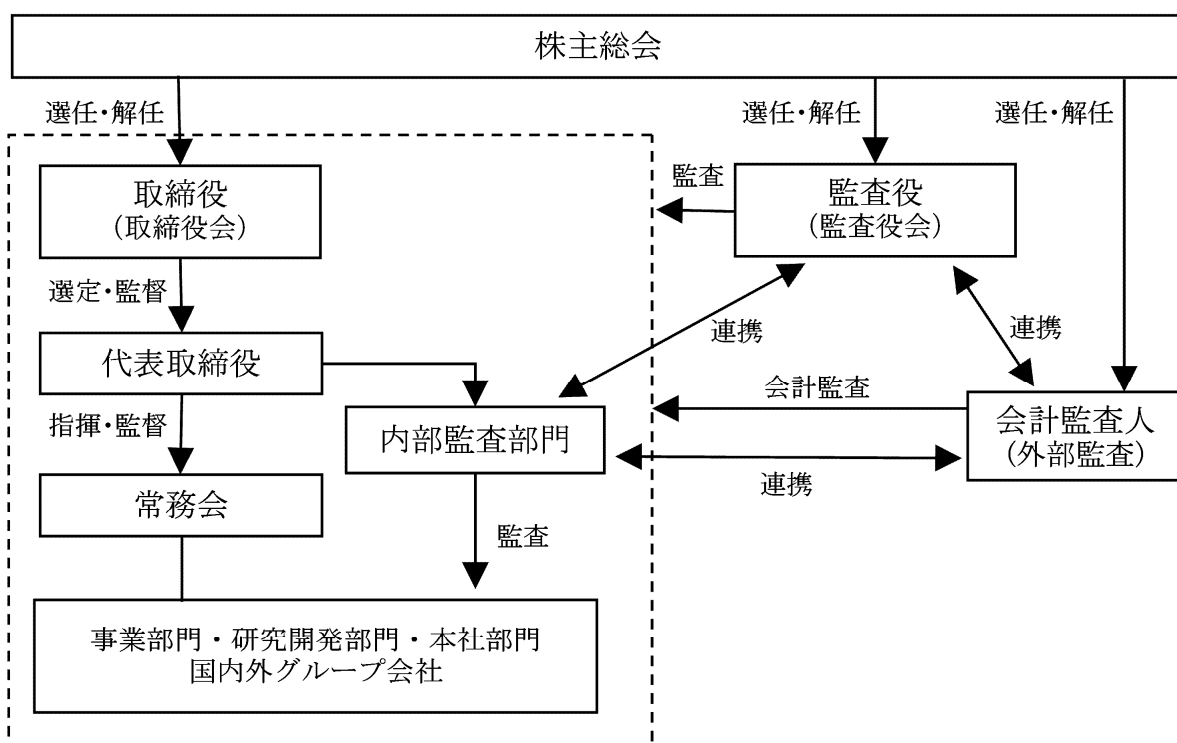
社外監査役 佐野三郎氏は、株式会社東京三菱銀行（現 株式会社三菱東京UFJ銀行）の常務執行役員及び株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループの代表取締役専務取締役を歴任しており、当社は株式会社三菱東京UFJ銀行からの借入金があります。ただし、同氏は同社の代表取締役を平成22年5月に、専務取締役を同年6月に退任して既に7年が経過していることに加え、同行からの借入金は僅少であり独立性に影響を及ぼすような重要性がないことから、実質上一般株主と利益相反が生じる恐れはありません。また、同氏は三菱プレジジョン株式会社の社外監査役であり、当社と三菱プレジジョン株式会社との間で営業取引がありますが、取引高は僅少であり独立性に影響を及ぼすような重要性がないことから、実質上一般株主と利益相反が生じる恐れはありません。

社外取締役 小館香椎子氏は、「5 役員の状況」の所有株式数欄に記載のとおり当社の株式を保有しておりますが、当社との間に記載すべき特別の利害関係はありません。

当社と社外取締役 鯉渕健氏、社外監査役 横祐治氏及び社外監査役 佐野三郎氏との間に特別の利害関係はありません。

当社は、社外取締役又は社外監査役を選任するための当社からの独立性に関する独自の基準又は方針について定めておりませんが、上記社外取締役及び社外監査役については、各氏とも当社の主要な取引先の業務執行者ではないことから、業務執行を行う当社経営陣から独立し、一般株主と利益相反が生じるおそれがないため、株式会社東京証券取引所の定める独立役員として同取引所へ届け出ております。

ロ．会社の機関の内容及び内部統制システムの整備の状況



取締役会は、上記コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方を当社グループ一人ひとりに徹底させることで、透明性の高いコーポレート・ガバナンス及び内部統制を構築するよう努めるとともに、会社法及び会社法施行規則に基づき、次のとおり当社の業務の適正を確保するための体制を整備しております。

- a 取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
 - (a) 会社の企業倫理及びコンプライアンスに関する基本的な考え方を明確にして全社員に周知を図る。
 - (b) 取締役会のほか、代表取締役を長とし取締役、監査役及び部長クラス以上の役職者が出席する「常務会」を定例的に開催し、随時課題の報告、検討をすることによりガバナンスの強化を図る。
- b 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制
 - (a) 取締役会、常務会、その他重要な各会議の議事録を作成して保管する。
 - (b) 情報は、IT化を進め、閲覧が容易な状態で保管する。
- c 損失の危機の管理に関する規程その他の体制
情報セキュリティ、品質、環境、災害、輸出管理等にかかるリスクについては、それぞれ責任部署を定め、規定、ガイドラインの作成、研修・教育等を実施する。
- d 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
 - (a) 取締役会規則の下、定時取締役会を毎月1回開催し、重要事項の決定及び業務執行状況の監督を行う。また、理事職制度の制定により、取締役会出席権限（議決権はなし）を付与することで、取締役会の活性化、意志伝達の迅速化を図る。
 - (b) 常務会規定の下、取締役及び監査役に加えて、部長クラス以上の役職者が出席する常務会を定例的に開催し、業務執行に関する基本的事項及び重要事項を多面的に検討し、直接関係者に説明、指示することで、業務執行の迅速化、効率化を図るとともに、役員及び幹部社員における情報の共有化を図る。さらに、その他諸会議を通じて、その他の社員に対する情報の伝達等を行う。
 - (c) 組織規定、業務分掌規定、職務権限規定を整備し、責任と権限を明確にする。
 - (d) 予算執行状況及び業績動向を把握するために、予算委員会の設置により、進捗状況とその対応について検討する。
 - (e) 従業員の安全衛生、コンプライアンス意識等の向上を図るため、入社時、管理職登用時を始めとして、随時教育を行う。
 - (f) 内部情報の開示については、正確かつ適時に対応する体制を整える。
 - (g) 個人情報の管理については、個人情報管理指針の下に各種ガイドラインを定めて対応する。
 - (h) 反社会的勢力排除の基本方針を明確にして、社内に周知徹底する。
 - (i) 内部統制監査規定の下、財務報告の適正性を確保するための必要な内部統制体制を整備する。
- e 当社グループ（当社及び連結子会社をいう）における業務の適正を確保するための体制
 - (a) 国内外の連結対象子会社については、原則として各社の自主性を尊重しつつ、統括する責任部署を定める。そして、連結対象子会社の規模や業態をふまえて、以下のような対応をする。
 - ・国内連結対象子会社においては、当社取締役又は幹部社員を子会社の取締役として派遣することで、当社の方針に沿った業務執行を行うと共に、業務執行の監督をする。また、監査役には当社の取締役又は幹部社員を派遣することで、リスクの回避に努める。
 - ・海外連結対象子会社においては、上記に加えて、経営に関する意思統一のために海外連結対象子会社の責任者を集めて報告・協議を定期的に行う。また、必要に応じて担当者を出向させ、もしくは現地に赴いて情報を入手する。
 - (b) 国内外の連結対象子会社は、当社に対して定期的に業績等の報告をするものとし、当社グループ間における協調を促進するために、必要に応じて連絡会議等を開催して意思の疎通を図るものとする。
 - (c) 国内外の連結対象子会社におけるリスクについては、当社の責任部署を窓口として、規模や業態に応じてリスク情報の共有、各種規定等の周知・作成、研修・教育等を実施することで対応する。
 - (d) 連結利益計画は、当社と連結対象子会社との間で情報の共有を図りつつ、これを策定する。
 - (e) 当社グループにおけるコンプライアンスの向上に向けて、CSR基本方針、企業行動規範について、連結対象子会社への周知を図る。

- f 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項
監査役が監査を補助すべき人員を求めた場合、当社従業員の中から人数、具備すべき能力等について監査役会の要望を尊重して任命する。
- g 前号の使用人の取締役からの独立性及び当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
当該従業員は、監査役会専任として監査役会の定めた基準に従って行動し、もっぱら監査役の指揮命令に従わなければならない。また、業務の執行に係る役職、他部署の使用人を兼務しない。
- h 当社グループの取締役及び使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制
取締役及び従業員（連結対象子会社の取締役、監査役及び使用人等を含む）は当社監査役から業務執行に関する事項について報告を求められた時は、速やかに適切な報告を行う。
また、法令もしくは定款に違反する行為等、当社グループに著しい損害を及ぼす恐れのある事実については、これを発見次第、直ちに監査役又は監査役会に対して報告を行うものとする。
- i 前号の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
当社は、監査役へ報告を行った当社グループの取締役及び従業員に対して、当該報告をしたことを理由として不利な取扱いはしない。
- j 監査役職務の執行について生ずる費用の前払又は償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項
監査役がその職務の執行について、当社に対し会社法第388条に基づく費用の前払い等の請求をしたときは、担当部署において審議の上、当該請求に係る費用または債務が当該監査役職務の執行に必要でないと認められた場合を除き、速やかに当該費用または債務を処理する。
- k その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制
監査役が会計監査人、内部統制監査部門、内部監査部門、子会社取締役及び監査役、監査補助員等からの適切な報告体制と連携、情報共有を踏まえ、業務監査・会計監査等のために実効的な監査活動を行うことを保証する。
- 1 責任限定契約の内容の概要
当社と社外取締役及び社外監査役は、定款に基づき、会社法第423条第1項に定める責任について、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度とする責任限定契約を締結しております。なお、当該責任限定が認められるのは、当該社外取締役または社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限られます。

ハ、会計監査の状況

当社は、新日本有限責任監査法人と監査契約を締結しております。当社の会計監査業務を執行した公認会計士は市村清氏及び相澤範忠氏であります。継続監査年数については、2名とも7年以内であるため、記載を省略しております。同監査法人は既に自主的に業務執行社員の交替制度を導入しており、継続監査年数が一定期間を超えないよう措置をとっております。当連結会計年度の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士5名及びその他9名であります。

②リスク管理体制の整備の状況

当社は、「当社の企業倫理及びコンプライアンスに関する基本的な考え方」並びに「CSR基本方針」を制定し、当社の行動規範を全従業員に周知するとともに、弁護士等の社外専門家と連携し、コンプライアンスの徹底に努めております。コンプライアンス体制の強化のため、公益通報制度を構築しております。さらに、「コーポレートガバナンスに関する基本方針」を策定して、当社ウェブサイトで開示しております。

また、取締役は、その担当業務ごとに規定等について取締役会で決議し、整備を進めることでグループ会社全体のリスクを網羅的、総括的に管理しております。

③株主総会決議事項を取締役で決議することができる事項

イ. 中間配当の決定機関

当社は、資本政策の機動性を確保するため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって中間配当を行うことができる旨を定款で定めております。

ロ. 自己株式取得の決定機関

当社は、資本効率の向上と経営環境に応じた機動的な資本政策の遂行のため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会決議による自己株式の取得を可能とする旨を定款で定めております。

④取締役の定数

当社は取締役を20名以内とする旨を定款で定めております。

⑤取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款で定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらない旨についても定款で定めております。

⑥株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を行うため、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって決議を行う旨を定款で定めております。

⑦役員報酬の内容

イ. 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額 (百万円)				対象となる役員の員数 (名)
		基本報酬	ストックオプション	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く)	440	440	—	—	—	12
監査役 (社外監査役を除く)	38	38	—	—	—	2
社外役員	18	18	—	—	—	5

(注) 取締役の支給額には、使用人兼務取締役の使用人分は含まれておりません。

ロ. 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である役員が存在しないため、記載しておりません。

ハ. 使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

該当事項はありません。

ニ．役員の報酬等の額の決定に関する方針

当社の取締役報酬額は、平成29年12月22日開催の定時株主総会決議により、月額55百万円以内（うち社外取締役3百万円以内）と定められております。また、監査役報酬額は平成24年12月20日開催の定時株主総会決議により、月額6百万円以内と定められております。

⑧株式の保有状況

イ．投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

銘柄数 28銘柄
貸借対照表計上額の合計額 2,599百万円

ロ．保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

前事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数（株）	貸借対照表計上額 （百万円）	保有目的
シグマ光機(株)	1,000,000	951	業務提携推進のため
(株)りそなホールディングス	505,400	213	金融取引の維持・発展のため
エンシュウ(株)	2,000,000	124	業務提携推進のため
(株)島津製作所	30,000	45	取引関係の維持・発展のため
(株)ニコン	14,000	21	取引関係の維持・発展のため
(株)静岡銀行	20,000	16	金融取引の維持・発展のため
(株)みずほフィナンシャルグループ	39,970	6	金融取引の維持・発展のため
日本電子(株)	12,000	4	取引関係の維持・発展のため
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	11,000	3	金融取引の維持・発展のため
横河電機(株)	915	1	取引関係の維持・発展のため
東洋電機(株)	2,000	0	取引関係の維持・発展のため

（注）(株)りそなホールディングス以下の銘柄については、貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下であります。

当事業年度
特定投資株式

銘柄	株式数（株）	貸借対照表計上額 （百万円）	保有目的
シグマ光機(株)	1,000,000	1,730	業務提携推進のため
エンシュウ(株)	2,000,000	302	業務提携推進のため
(株)りそなホールディングス	505,400	292	金融取引の維持・発展のため
(株)島津製作所	30,000	66	取引関係の維持・発展のため
(株)ニコン	14,000	27	取引関係の維持・発展のため
(株)静岡銀行	20,000	20	金融取引の維持・発展のため
(株)みずほフィナンシャルグループ	39,970	7	金融取引の維持・発展のため
日本電子(株)	12,000	6	取引関係の維持・発展のため
三井住友トラスト・ホールディングス(株)	1,100	4	金融取引の維持・発展のため
横河電機(株)	915	1	取引関係の維持・発展のため
東洋電機(株)	1,000	0	取引関係の維持・発展のため

- (注) 1 エンシュウ(株)以下の銘柄については、貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下であります。
- 2 三井住友トラスト・ホールディングス(株)は、平成28年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を行っております。
- 3 東洋電機(株)は、平成28年10月1日付で普通株式2株を1株とする株式併合を行っております。

ハ．保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

ニ．保有目的を変更した投資株式
該当事項はありません。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	60	—	60	—
連結子会社	—	—	—	—
計	60	—	60	—

② 【その他重要な報酬の内容】

＜前連結会計年度＞

当社の連結子会社の一部は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属している Ernst & Young のメンバーファーム（新日本有限責任監査法人を除く）に対して、監査証明業務に基づく報酬として9百万円を支払っております。

＜当連結会計年度＞

当社の連結子会社の一部は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属している Ernst & Young のメンバーファーム（新日本有限責任監査法人を除く）に対して、監査証明業務に基づく報酬として8百万円を支払っております。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

＜前連結会計年度＞

該当事項はありません。

＜当連結会計年度＞

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

当社では、監査公認会計士等に対する監査報酬を決定するにあたり、監査公認会計士等より提示される監査計画の内容をもとに、監査工数等の妥当性を勘案、協議し、会社法第399条に基づき、監査役会の同意を得た上で決定することとしております。

第5【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。
- また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成28年10月1日から平成29年9月30日まで）の連結財務諸表及び事業年度（平成28年10月1日から平成29年9月30日まで）の財務諸表について、新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等に的確に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※2 74,503	※2 83,902
受取手形及び売掛金	27,916	※4 33,608
有価証券	1,000	—
商品及び製品	7,554	8,742
仕掛品	16,248	16,389
原材料及び貯蔵品	6,241	6,620
繰延税金資産	3,239	3,545
その他	3,993	4,184
貸倒引当金	△188	△159
流動資産合計	140,508	156,834
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	※2, ※3 70,847	※2, ※3 74,585
減価償却累計額	△41,615	△42,917
建物及び構築物（純額）	※2, ※3 29,231	※2, ※3 31,668
機械装置及び運搬具	※3 75,515	※3 78,393
減価償却累計額	△65,444	△68,549
機械装置及び運搬具（純額）	※3 10,070	※3 9,843
工具、器具及び備品	※3 30,032	※3 31,005
減価償却累計額	△26,269	△27,054
工具、器具及び備品（純額）	※3 3,762	※3 3,951
土地	※2, ※3 16,406	※2, ※3 16,545
リース資産	434	567
減価償却累計額	△238	△267
リース資産（純額）	195	299
建設仮勘定	4,625	5,983
有形固定資産合計	64,292	68,291
無形固定資産	1,463	1,697
投資その他の資産		
投資有価証券	※1 2,446	※1 3,684
投資不動産	1,667	1,972
減価償却累計額	△1,374	△1,405
投資不動産（純額）	292	566
繰延税金資産	6,638	6,412
その他	※1 1,678	※1 1,862
貸倒引当金	△19	△19
投資その他の資産合計	11,036	12,507
固定資産合計	76,792	82,497
資産合計	217,300	239,331

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	4,580	※4 5,232
電子記録債務	8,880	8,866
短期借入金	※2 2,183	※2 2,230
1年内返済予定の長期借入金	※2 218	※2 3,194
未払法人税等	2,019	3,517
賞与引当金	3,613	4,570
その他	※2 10,380	※2 12,446
流動負債合計	31,876	40,059
固定負債		
長期借入金	※2 6,844	※2 3,683
繰延税金負債	182	272
退職給付に係る負債	7,118	7,025
その他	1,561	731
固定負債合計	15,707	11,713
負債合計	47,583	51,773
純資産の部		
株主資本		
資本金	34,928	34,928
資本剰余金	34,672	34,672
利益剰余金	119,259	131,678
自己株式	△16,059	△16,060
株主資本合計	172,800	185,219
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	455	1,259
為替換算調整勘定	△2,921	1,210
退職給付に係る調整累計額	△1,170	△750
その他の包括利益累計額合計	△3,637	1,719
非支配株主持分	553	618
純資産合計	169,716	187,558
負債純資産合計	217,300	239,331

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
売上高	121,852	130,495
売上原価	※1 60,807	※1 65,670
売上総利益	61,044	64,825
販売費及び一般管理費		
運賃及び荷造費	1,036	1,111
広告宣伝費	903	925
給料	10,253	10,558
賞与引当金繰入額	1,077	1,436
退職給付費用	812	857
減価償却費	1,603	1,547
支払手数料	3,588	3,721
研究開発費	※2 11,873	※2 11,776
貸倒引当金繰入額	68	△30
その他	9,282	10,070
販売費及び一般管理費合計	40,500	41,975
営業利益	20,544	22,849
営業外収益		
受取利息	237	207
受取配当金	40	45
固定資産賃貸料	77	70
投資不動産賃貸料	79	76
為替差益	—	495
持分法による投資利益	57	102
その他	328	409
営業外収益合計	821	1,407
営業外費用		
支払利息	97	121
不動産賃貸費用	65	81
為替差損	1,115	—
その他	36	15
営業外費用合計	1,314	219
経常利益	20,050	24,037
特別利益		
固定資産売却益	※3 31	※3 20
補助金収入	781	214
投資有価証券売却益	—	0
特別利益合計	813	234

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
特別損失		
固定資産売却損	※4 4	※4 6
固定資産除却損	※4 71	※4 484
固定資産圧縮損	707	206
投資有価証券評価損	0	5
特別損失合計	783	701
税金等調整前当期純利益	20,080	23,570
法人税、住民税及び事業税	5,294	6,137
法人税等調整額	318	△409
法人税等合計	5,612	5,727
当期純利益	14,467	17,842
非支配株主に帰属する当期純利益	47	65
親会社株主に帰属する当期純利益	14,419	17,777

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
当期純利益	14,467	17,842
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△64	804
為替換算調整勘定	△7,352	4,136
退職給付に係る調整額	△2,245	420
持分法適用会社に対する持分相当額	△39	20
その他の包括利益合計	※ △9,702	※ 5,381
包括利益	4,765	23,224
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	4,820	23,134
非支配株主に係る包括利益	△55	90

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	34,928	34,672	110,637	△6,059	174,179
当期変動額					
剰余金の配当			△5,797		△5,797
親会社株主に帰属する当期純利益			14,419		14,419
自己株式の取得				△10,000	△10,000
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	8,621	△10,000	△1,378
当期末残高	34,928	34,672	119,259	△16,059	172,800

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	520	4,367	1,074	5,962	629	180,770
当期変動額						
剰余金の配当						△5,797
親会社株主に帰属する当期純利益						14,419
自己株式の取得						△10,000
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△64	△7,289	△2,245	△9,599	△76	△9,675
当期変動額合計	△64	△7,289	△2,245	△9,599	△76	△11,054
当期末残高	455	△2,921	△1,170	△3,637	553	169,716

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	34,928	34,672	119,259	△16,059	172,800
当期変動額					
剰余金の配当			△5,357		△5,357
親会社株主に帰属する当期純利益			17,777		17,777
自己株式の取得				△0	△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	－	12,419	△0	12,419
当期末残高	34,928	34,672	131,678	△16,060	185,219

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利 益累計額合計		
当期首残高	455	△2,921	△1,170	△3,637	553	169,716
当期変動額						
剰余金の配当						△5,357
親会社株主に帰属する当期純利益						17,777
自己株式の取得						△0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	804	4,132	420	5,357	65	5,422
当期変動額合計	804	4,132	420	5,357	65	17,841
当期末残高	1,259	1,210	△750	1,719	618	187,558

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	20,080	23,570
減価償却費	10,547	10,043
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	65	△45
賞与引当金の増減額 (△は減少)	189	911
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	2	468
受取利息及び受取配当金	△278	△253
支払利息	97	121
為替差損益 (△は益)	59	△26
持分法による投資損益 (△は益)	△57	△102
有形固定資産除却損	71	484
有形固定資産売却損益 (△は益)	△27	△13
売上債権の増減額 (△は増加)	△1,669	△4,106
たな卸資産の増減額 (△は増加)	△2,369	△563
仕入債務の増減額 (△は減少)	2,408	△994
その他	812	1,193
小計	29,934	30,688
利息及び配当金の受取額	280	247
利息の支払額	△97	△121
法人税等の支払額又は還付額 (△は支払)	△5,956	△4,660
営業活動によるキャッシュ・フロー	24,160	26,154
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の純増減額 (△は増加)	14,936	590
有価証券の取得による支出	△1,000	—
有価証券の売却による収入	—	1,000
有形固定資産の取得による支出	△9,144	△13,773
有形固定資産の売却による収入	47	31
無形固定資産の取得による支出	△424	△741
その他	△228	△305
投資活動によるキャッシュ・フロー	4,186	△13,198
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	419	△29
長期借入れによる収入	3,261	38
長期借入金の返済による支出	△3,178	△224
自己株式の取得による支出	△10,000	△0
配当金の支払額	△5,798	△5,359
その他	△117	△132
財務活動によるキャッシュ・フロー	△15,413	△5,707
現金及び現金同等物に係る換算差額	△4,894	2,541
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	8,039	9,790
現金及び現金同等物の期首残高	45,556	53,595
現金及び現金同等物の期末残高	※ 53,595	※ 63,385

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 17社

主要な連結子会社の名称

ハママツ・コーポレーション

ハママツ・ホトニクス・ドイチュラント・ゲー・エム・ペー・ハー

浜松光子学商貿(中国)有限公司

ハママツ・ホトニクス・フランス・エス・ア・エール・エル

(2) 非連結子会社の数 1社

非連結子会社の名称

(株)浜松ホトアグリ

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社は、小規模であり、総資産、売上高、当期純損益及び利益剰余金等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないためであります。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社数 3社

主要な関連会社の名称

浜松光電(株)

(2) 持分法を適用していない非連結子会社(株)浜松ホトアグリは、当期純損益及び利益剰余金等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

(3) 持分法適用会社は、決算日が連結決算日と異なるため当該会社の事業年度に係る財務諸表を使用しております。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、北京浜松光子技術股份有限公司、浜松光子学商貿(中国)有限公司、浜松光子学科学儀器(北京)有限公司、浜松光子医療科技(廊坊)有限公司及び(株)磐田グランドホテルを除いてすべて連結決算日と一致しております。

北京浜松光子技術股份有限公司、浜松光子学商貿(中国)有限公司、浜松光子学科学儀器(北京)有限公司及び浜松光子医療科技(廊坊)有限公司の決算日は12月31日ではありますが、6月30日において仮決算を実施したうえ連結財務諸表を作成しております。なお、連結決算日までの期間に発生した重要な取引については、連結上、必要な調整を行っております。

また、(株)磐田グランドホテルの決算日は3月31日ではありますが、9月30日において仮決算を実施したうえ連結財務諸表を作成しております。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

連結会計年度末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定)

時価のないもの

総平均法に基づく原価法

デリバティブ

時価法

たな卸資産

主として総平均法に基づく原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)によっております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産及び投資不動産（リース資産を除く）

当社及び国内連結子会社は定率法を採用し、海外連結子会社は主として定額法によっております。なお、主な耐用年数は、建物及び構築物が3年～50年、機械装置及び運搬具が3年～17年であります。

無形固定資産

主として定額法によっております。

ただし、当社及び国内連結子会社が所有する市場販売目的のソフトウェアについては、見込販売数量に基づく償却額と残存有効期間（3年以内）に基づく均等配分額とを比較し、いずれか大きい額を計上しております。

リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

賞与引当金

当社及び連結子会社の一部は、従業員の賞与の支給に充てるため、支給見込額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、主として給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、主としてその発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、主として各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。

(5) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、海外連結子会社等の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めております。

(6) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却につきましては、5年間の均等償却を行っております。

なお、金額が僅少な場合には発生年度に全額を償却しております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理方法

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっております。

(追加情報)

(繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針の適用)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第26号 平成28年3月28日）を当連結会計年度から適用しております。

(連結貸借対照表関係)

※1 非連結子会社及び関連会社の株式等は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
投資有価証券(株式)	893百万円	994百万円
投資その他の資産その他(出資金)	183	274

※2 担保提供資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
現金及び預金	2,850百万円	2,750百万円
建物及び構築物	912	852
土地	1,052	1,052
計	4,815	4,655

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
短期借入金	1,029百万円	1,011百万円
1年内返済予定の長期借入金	180	154
流動負債その他(従業員預り金)	1,766	1,753
長期借入金	406	285
計	3,383	3,204

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度において、上記担保付債務以外に、現金及び預金のうち100百万円は一般財団法人浜松光医学財団の当座貸越契約の担保に供しております。

※3 国庫等補助金により取得した資産につき取得価額から控除されている圧縮記帳額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
建物及び構築物	799百万円	797百万円
機械装置及び運搬具	2,289	2,485
工具、器具及び備品	358	368
土地	756	756

※4 連結会計年度末日満期手形

連結会計年度末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。なお、当連結会計年度の末日が金融機関の休日であったため、次の連結会計年度末日満期手形が連結会計年度末残高に含まれております。

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
受取手形	一百万円	243百万円
支払手形	—	8

(連結損益計算書関係)

- ※1 期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下げ後の金額であり、次のたな卸資産評価損が売上原価に含まれております。

前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
84百万円	208百万円

- ※2 一般管理費に含まれる研究開発費の総額

前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
11,873百万円	11,776百万円

- ※3 固定資産売却益の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
機械装置及び運搬具	0百万円	10百万円
工具、器具及び備品	31	10
計	31	20

- ※4 固定資産売却損及び固定資産除却損の内訳は次のとおりであります。
(固定資産売却損)

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
機械装置及び運搬具	0百万円	5百万円
工具、器具及び備品	3	0
計	4	6

(固定資産除却損)

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
建物及び構築物	47百万円	440百万円
機械装置及び運搬具	14	14
工具、器具及び備品	8	27
リース資産	—	1
建設仮勘定	—	0
計	71	484

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	△99百万円	1,071百万円
税効果調整前	△99	1,071
税効果額	34	△267
その他有価証券評価差額金	△64	804
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△7,352	4,136
為替換算調整勘定	△7,352	4,136
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	△3,057	402
組替調整額	△161	198
税効果調整前	△3,219	600
税効果額	974	△180
退職給付に係る調整額	△2,245	420
持分法適用会社に対する持分相当額：		
当期発生額	△39	20
その他の包括利益合計	△9,702	5,381

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	167,529,968	—	—	167,529,968

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	6,743,639	3,470,119	—	10,213,758

(注) 増加数の内訳は、取締役会決議による自己株式の取得による増加3,470,000株、単元未満株式の買取による増加119株であります。

3 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成27年12月18日 定時株主総会	普通株式	3,060	19	平成27年9月30日	平成27年12月21日
平成28年5月9日 取締役会	普通株式	2,737	17	平成28年3月31日	平成28年6月2日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成28年12月16日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	2,678	17	平成28年9月30日	平成28年12月19日

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（株）	167,529,968	—	—	167,529,968

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式（株）	10,213,758	128	—	10,213,886

（注）普通株式の自己株式の増加128株は、単元未満株式の買取による増加であります。

3 配当に関する事項

（1）配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり配当額 （円）	基準日	効力発生日
平成28年12月16日 定時株主総会	普通株式	2,678	17	平成28年9月30日	平成28年12月19日
平成29年5月8日 取締役会	普通株式	2,678	17	平成29年3月31日	平成29年6月2日

（2）基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 （百万円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
平成29年12月22日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	2,678	17	平成29年9月30日	平成29年12月25日

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 （自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）	当連結会計年度 （自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）
現金及び預金勘定	74,503百万円	83,902百万円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	△20,907	△20,516
現金及び現金同等物	53,595	63,385

（リース取引関係）

オペレーティング・リース取引

（借主側）

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

（単位：百万円）

	前連結会計年度 （平成28年9月30日）	当連結会計年度 （平成29年9月30日）
1年以内	90	69
1年超	53	120
合計	144	189

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

待機資金の運用については、安全性、流動性を第一に考え、高格付金融機関への預金等を中心に実施しております。

資金調達については、金利、調達環境を勘案し、金融市場または資本市場より実施する方針であります。

デリバティブ取引については、一部の連結子会社において、外貨建債権債務の変動リスクを軽減するために、実需の範囲内で行うこととし、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、外貨建の営業債権は、為替の変動リスクに晒されております。有価証券及び投資有価証券は、主に取引先企業との事業提携・連携強化を目的とする株式であり、これらの株式は市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金、電子記録債務は、すべて1年以内の支払期日であります。また、その一部には、原材料等の輸入に伴う外貨建のものがあり、為替の変動リスクに晒されております。

デリバティブ取引は、通常の輸出入取引による外貨建債権債務に伴う、為替相場の変動によるリスクを軽減するために、先物為替予約取引を行っております。先物為替予約取引は、為替相場の変動によるリスクを有しております。

(3) 金融商品に関するリスク管理体制

①信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、営業債権については、経理規定に従い取引先ごとの期日及び残高を管理するとともに、財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社についても、当社に準じた管理を行っております。

②市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社は、輸出の大部分を円建で行うことにより、為替の変動リスク軽減を図っております。また、一部の連結子会社において、外貨建債権債務について通常の輸出入取引に伴う為替相場の変動によるリスクを軽減するために、先物為替予約取引を実需の範囲内で行うこととしております。

有価証券及び投資有価証券については、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握し、また、満期保有目的の債券以外のものについては、保有状況を継続的に見直しております。

③資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払を実行できなくなるリスク）の管理

当社及び連結子会社が資金計画を作成・更新する方法により、手元流動性を当社売上高の3ヶ月相当以上に維持することなどにより、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

また、注記事項「デリバティブ取引関係」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（（注）2参照）。

前連結会計年度（平成28年9月30日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価（百万円）	差額（百万円）
(1) 現金及び預金	74,503	74,503	—
(2) 受取手形及び売掛金	27,916	27,916	—
(3) 有価証券及び投資有価証券	2,388	2,388	—
資産計	104,807	104,807	—
デリバティブ取引（※1）	6	6	—

（※1）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については（ ）で示しております。

当連結会計年度（平成29年9月30日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価（百万円）	差額（百万円）
(1) 現金及び預金	83,902	83,902	—
(2) 受取手形及び売掛金	33,608	33,608	—
(3) 有価証券及び投資有価証券	2,460	2,460	—
資産計	119,970	119,970	—
デリバティブ取引（※1）	(8)	(8)	—

（※1）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については（ ）で示しております。

（注）1 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券及び投資有価証券

譲渡性預金については短期で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。また、株式等は主に取引所の価格によっております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

デリバティブ取引

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照下さい。

2 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

（単位：百万円）

区分	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
非上場株式	1,058	1,224

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(3) 有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。

3 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成28年9月30日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預金	74,484	—	—	—
受取手形及び売掛金	27,916	—	—	—
有価証券及び投資有価証券 その他有価証券のうち満期があるもの （譲渡性預金）	1,000	—	—	—
合計	103,400	—	—	—

当連結会計年度（平成29年9月30日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預金	83,887	—	—	—
受取手形及び売掛金	33,608	—	—	—
合計	117,495	—	—	—

(有価証券関係)

1 その他有価証券

前連結会計年度 (平成28年9月30日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	1,248	764	483
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	1,248	764	483
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	140	146	△6
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他 (譲渡性預金)	1,000	1,000	—
	小計	1,140	1,146	△6
合計		2,388	1,911	477

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額164百万円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (平成29年9月30日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	2,460	911	1,548
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	2,460	911	1,548
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	—	—	—
	(2) 債券	—	—	—
	(3) その他	—	—	—
	小計	—	—	—
合計		2,460	911	1,548

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額229百万円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）
該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）
金額的重要性が乏しいため、記載を省略しております。

3 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）
金額的重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）
金額的重要性が乏しいため、記載を省略しております。

なお、減損処理にあたっては、期末における時価が取得原価に比べ30%以上下落した場合には減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引
通貨関連

前連結会計年度（平成28年9月30日）

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	為替予約取引 買建 円	475	—	6	6
合計		475	—	6	6

(注) 時価の算定方法

取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度（平成29年9月30日）

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	為替予約取引 買建 円	396	—	△8	△8
合計		396	—	△8	△8

(注) 時価の算定方法

取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引
該当事項はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社及び一部の連結子会社は、主として、確定給付型の制度として確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を設けております。なお、一部の連結子会社は、確定拠出制度を採用しております。

また、当社において退職給付信託を設定しております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
退職給付債務の期首残高	29,806百万円	33,525百万円
勤務費用	1,499	1,739
利息費用	270	60
数理計算上の差異の発生額	3,057	△154
退職給付の支払額	△1,036	△953
為替換算差額	△71	38
退職給付債務の期末残高	33,525	34,256

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
年金資産の期首残高	25,849百万円	26,407百万円
期待運用収益	383	391
数理計算上の差異の発生額	△11	247
事業主からの拠出額	693	706
退職給付の支払額	△508	△520
年金資産の期末残高	26,407	27,231

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
積立型制度の退職給付債務	33,146百万円	33,856百万円
年金資産	△26,407	△27,231
	6,739	6,625
非積立型制度の退職給付債務	378	399
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	7,118	7,025
退職給付に係る負債	7,118	7,025
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	7,118	7,025

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
勤務費用	1,499百万円	1,739百万円
利息費用	270	60
期待運用収益	△383	△391
数理計算上の差異の費用処理額	△75	284
過去勤務費用の費用処理額	△86	△86
確定給付制度に係る退職給付費用	1,224	1,607

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
過去勤務費用	86百万円	86百万円
数理計算上の差異	3,144	△685
その他	△11	△1
合 計	3,219	△600

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
未認識過去勤務費用	△345百万円	△259百万円
未認識数理計算上の差異	2,023	1,336
合 計	1,677	1,076

(7) 年金資産に関する事項

①年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
債券	56%	48%
一般勘定	26	26
株式	12	11
その他	6	15
合 計	100	100

(注) 年金資産合計には、退職給付信託が前連結会計年度39%、当連結会計年度38%含まれております。

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
割引率	0.2%	0.2%
長期期待運用収益率	主として2.0%	主として2.0%
予想昇給率	2.9%	2.9%

3 確定拠出制度

連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度483百万円、当連結会計年度514百万円であります。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
繰延税金資産		
退職給付信託設定額	3,034百万円	3,053百万円
退職給付に係る負債	2,015	1,978
減価償却費限度超過額	1,930	1,955
賞与引当金限度超過額	1,016	1,238
たな卸資産等の未実現利益	978	1,159
たな卸資産評価損否認額	470	476
役員退職慰労金	—	290
減損損失	257	257
投資有価証券評価損	220	207
その他	1,564	1,202
繰延税金資産小計	11,490	11,818
評価性引当額	△1,486	△1,260
繰延税金資産合計	10,003	10,557
繰延税金負債との相殺	△125	△599
繰延税金資産の純額	9,877	9,958
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額	21	288
優遇税制による所得繰延額	137	154
その他	169	453
繰延税金負債合計	329	896
繰延税金資産との相殺	△125	△599
繰延税金負債の純額	203	297

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金資産及び繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
流動資産－繰延税金資産	3,239百万円	3,545百万円
固定資産－繰延税金資産	6,638	6,412
流動負債－その他	21	24
固定負債－繰延税金負債	182	272

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年9月30日)	当連結会計年度 (平成29年9月30日)
法定実効税率	32.33%	30.21%
(調整)		
税額控除	△5.30	△5.78
評価性引当額の増減	0.08	△0.96
海外連結子会社との税率差異	△2.77	△0.22
交際費等永久に損金算入されない項目	0.88	0.70
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	1.97	—
その他	0.76	0.35
税効果会計適用後の法人税等の負担率	27.95	24.30

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、本社に製品・サービス別の事業部を置き、各事業部は、取り扱う製品・サービスについて国内及び海外の包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。

したがって、当社は、事業部を基礎とした製品・サービス別のセグメントから構成されており、「電子管事業」、「光半導体事業」及び「画像計測機器事業」の3つを報告セグメントとしております。

「電子管事業」は、光電子増倍管、イメージ機器及び光源等を製造・販売しております。「光半導体事業」は、光半導体素子等を製造・販売しております。「画像計測機器事業」は、画像処理・計測装置等を製造・販売しております。

2 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値です。セグメント間の内部売上高は市場実勢価格に基づいております。

3 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）

(単位：百万円)

	報告セグメント				その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結 財務諸表 計上額 (注) 3
	電子管	光半導体	画像計測機器	計				
売上高								
外部顧客への売上高	45,608	55,592	16,352	117,552	4,299	121,852	—	121,852
セグメント間の内部売上高又は振替高	1,281	839	14	2,135	921	3,056	△3,056	—
計	46,890	56,432	16,366	119,688	5,220	124,908	△3,056	121,852
セグメント利益	15,342	16,141	3,538	35,022	572	35,594	△15,050	20,544
セグメント資産	44,829	43,733	12,052	100,614	6,851	107,466	109,834	217,300
その他の項目								
減価償却費	3,527	4,101	914	8,544	399	8,943	1,559	10,503
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	3,323	3,732	927	7,983	373	8,357	1,378	9,736

(注) 1 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、半導体レーザーに係る事業、子会社の(株)磐田グランドホテルが営むホテル事業及び子会社の北京浜松光子技術股份有限公司の独自製品に係る事業を含んでおります。

2 調整額は以下のとおりであります。

(1) セグメント利益の調整額△15,050百万円には、セグメント間取引消去△1,238百万円及び各報告セグメントに配分していない全社費用△13,811百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費及び基礎的研究費であります。

(2) セグメント資産の調整額109,834百万円の主な内容は、各報告セグメントに配分していない全社資産であります。

(3) 減価償却費の調整額1,559百万円の主な内容は、各報告セグメントに配分していない全社資産に係る減価償却費であります。

(4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額1,378百万円の主な内容は、各報告セグメントに配分していない全社資産に係る固定資産の増加額であります。

3 セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。

	報告セグメント				その他 (注) 1	合計	調整額 (注) 2	連結 財務諸表 計上額 (注) 3
	電子管	光半導体	画像計測機 器	計				
売上高								
外部顧客への売上高	48,744	60,589	17,214	126,547	3,947	130,495	—	130,495
セグメント間の内部売上高又は振替高	1,704	937	27	2,670	640	3,310	△3,310	—
計	50,449	61,526	17,242	129,218	4,587	133,805	△3,310	130,495
セグメント利益	16,992	18,155	3,544	38,692	281	38,973	△16,124	22,849
セグメント資産	47,110	50,243	12,437	109,791	6,183	115,974	123,356	239,331
その他の項目								
減価償却費	3,420	3,903	869	8,193	338	8,531	1,468	10,000
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	2,801	5,654	1,222	9,678	285	9,963	4,360	14,324

(注) 1 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、半導体レーザーに係る事業、子会社の榊田ランドホテルが営むホテル事業及び子会社の北京浜松光子技術股份有限公司の独自製品に係る事業を含んでおります。

2 調整額は以下のとおりであります。

- (1) セグメント利益の調整額△16,124百万円には、セグメント間取引消去△1,506百万円及び各報告セグメントに配分していない全社費用△14,617百万円が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費及び基礎的研究費であります。
- (2) セグメント資産の調整額123,356百万円の主な内容は、各報告セグメントに配分していない全社資産であります。
- (3) 減価償却費の調整額1,468百万円の主な内容は、各報告セグメントに配分していない全社資産に係る減価償却費であります。
- (4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額4,360百万円の主な内容は、各報告セグメントに配分していない全社資産に係る固定資産の増加額であります。

3 セグメント利益は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	米国	欧州	アジア	その他	合計
36,258	32,704	30,138	22,489	261	121,852

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）

1 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	米国	欧州	アジア	その他	合計
38,378	33,314	32,961	25,546	293	130,495

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）

金額的重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）

金額的重要性が乏しいため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等
前連結会計年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者との 関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員	晝馬 輝夫	—	—	当社取締役 会長	(被所有) 直接 0.6	—	自己株式の 取得	2,870	—	—

(注) 自己株式の取得は、東京証券取引所の自己株式立会外買付取引 (ToSTNeT-3) を利用し、取引金額は平成28年5月27日の終値によるものであります。

当連結会計年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
1株当たり純資産額	1,075円31銭	1,188円30銭
1株当たり当期純利益	90円23銭	113円00銭

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当連結会計年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	14,419	17,777
普通株主に帰属しない金額 (百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	14,419	17,777
普通株式の期中平均株式数 (千株)	159,812	157,316

(重要な後発事象)

(取得による企業結合)

当社は、平成29年9月11日の取締役会において、連結子会社であるホトニクス・マネージメント・コーポが、光源を製造、販売するエナジティック・テクノロジー・インクを子会社化することを決議し、平成29年9月20日付けで株式譲渡契約を締結いたしました。当該株式の取得は、平成29年10月16日に完了しております。

1 企業結合の概要

(1) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称	エナジティック・テクノロジー・インク
事業の内容	半導体検査用光源の開発、製造及び販売

(2) 企業結合を行った主な理由

当社の光源に、同社のレーザ励起光源及び極紫外線光源を加え、当社グループの製品ラインナップを拡充することで半導体検査装置市場からの要求に対応してまいります。また、両社が培ってきた光源開発技術を組み合わせることで開発速度を上げるとともに、より高付加価値な製品を開発し新たな市場を開拓してまいります。

(3) 企業結合日

平成29年10月16日

(4) 企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

(5) 結合後企業の名称

エナジティック・テクノロジー・インク

(6) 取得した議決権比率

100%

(7) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社の連結子会社であるホトニクス・マネージメント・コーポが、現金を対価として株式を取得したことによるものであります。

2 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	6,040百万円
取得原価		6,040

(注) 上記の金額は取得時点の概算額であり、今後の価格調整等により実際の金額は上記と異なる可能性があります。

3 主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザー費用等（概算額）	102百万円
----------------	--------

4 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

現時点では確定しておりません。

5 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

現時点では確定しておりません。

(自己株式の取得及び消却)

当社は、平成29年11月13日開催の取締役会において、会社法第165条第3項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づき、自己株式取得に係る事項を決議するとともに、会社法第178条の規定に基づき、自己株式を消却することを決議いたしました。

1 自己株式の取得及び消却を行う理由

経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行及び株主還元策の一環として、自己株式の取得及び消却を行うものであります。

2 取得に係る事項の内容

(1) 取得対象株式の種類

当社普通株式

(2) 取得し得る株式の総数

3,000,000株(上限)

(発行済株式数(自己株式を除く)に対する割合1.90%)

(3) 株式の取得価額の総額

10,000百万円(上限)

(4) 取得期間

平成29年11月14日～平成30年3月23日

(5) 取得方法

東京証券取引所における市場買付

3 消却に係る事項の内容

(1) 消却する株式の種類

当社普通株式

(2) 消却する株式の数

上記2により取得した自己株式の全数

(3) 消却予定日

平成30年4月20日

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	2,183	2,230	0.7	—
1年以内に返済予定の長期借入金	218	3,194	0.4	—
1年以内に返済予定のリース債務	80	102	—	—
長期借入金 (1年以内に返済予定のものを除く)	6,844	3,683	0.4	平成31年8月 ～平成43年5月
リース債務 (1年以内に返済予定のものを除く)	107	234	—	平成30年10月 ～平成36年2月
その他有利子負債 (従業員預り金)	1,766	1,753	1.0	—
合計	11,201	11,200	—	—

(注) 1 平均利率は、当期末における借入金の利率を加重平均して算出しております。

2 リース債務の平均利率については、主としてリース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3 長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く）及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く）の連結決算日後5年間の返済予定額は次のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	3,171	162	69	39
リース債務	87	57	46	39

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	29,981	64,953	95,945	130,495
税金等調整前四半期 (当期) 純利益 (百万円)	4,770	11,954	17,430	23,570
親会社株主に帰属する四半期 (当期) 純利益 (百万円)	3,621	8,917	13,138	17,777
1株当たり四半期 (当期) 純 利益 (円)	23.02	56.69	83.51	113.00

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (円)	23.02	33.67	26.83	29.49

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※2 48,441	※2 58,115
受取手形	4,178	※3 5,777
売掛金	※1 25,617	※1 24,730
有価証券	1,000	—
商品及び製品	2,569	2,773
仕掛品	15,899	15,996
原材料及び貯蔵品	5,786	6,086
繰延税金資産	1,778	2,338
未収入金	※1 2,702	※1 2,893
その他	※1 379	232
貸倒引当金	△32	△33
流動資産合計	108,320	118,911
固定資産		
有形固定資産		
建物	※4 23,077	※4 25,441
構築物	※4 1,726	※4 1,683
機械及び装置	※4 9,288	※4 9,105
車両運搬具	※4 28	※4 28
工具、器具及び備品	※4 2,944	※4 2,963
土地	※4 14,458	※4 14,520
リース資産	122	247
建設仮勘定	4,564	5,433
有形固定資産合計	56,210	59,424
無形固定資産		
特許権	348	243
ソフトウェア	589	668
その他	16	15
無形固定資産合計	955	928
投資その他の資産		
投資有価証券	1,522	2,599
関係会社株式	8,346	8,381
出資金	1	1
関係会社出資金	1,414	1,414
繰延税金資産	6,112	6,075
投資不動産	※5 129	※5 117
その他	1,026	964
貸倒引当金	△19	△19
投資その他の資産合計	18,534	19,534
固定資産合計	75,699	79,886
資産合計	184,019	198,798

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	82	—
電子記録債務	※1 8,880	※1 8,866
買掛金	※1 4,600	※1 4,869
1年内返済予定の長期借入金	—	3,000
リース債務	63	80
未払金	※1 2,326	※1 3,347
未払費用	901	1,213
未払法人税等	1,583	3,007
前受金	9	142
預り金	162	341
賞与引当金	3,303	4,037
設備関係電子記録債務	1,804	1,459
従業員預り金	※2 1,766	※2 1,753
その他	24	32
流動負債合計	25,511	32,151
固定負債		
長期借入金	6,000	3,000
リース債務	72	194
退職給付引当金	5,019	5,503
資産除去債務	147	150
その他	1,275	315
固定負債合計	12,515	9,163
負債合計	38,027	41,315
純資産の部		
株主資本		
資本金	34,928	34,928
資本剰余金		
資本準備金	34,636	34,636
資本剰余金合計	34,636	34,636
利益剰余金		
利益準備金	695	695
その他利益剰余金		
特別償却準備金	18	14
配当準備積立金	4,500	4,500
別途積立金	71,600	78,600
繰越利益剰余金	15,213	18,904
利益剰余金合計	92,027	102,713
自己株式	△16,055	△16,056
株主資本合計	145,537	156,223
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	455	1,259
評価・換算差額等合計	455	1,259
純資産合計	145,992	157,483
負債純資産合計	184,019	198,798

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当事業年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
売上高	※1 101,786	※1 110,200
売上原価	※1 60,272	※1 64,358
売上総利益	41,513	45,842
販売費及び一般管理費	※1, ※2 27,850	※1, ※2 29,099
営業利益	13,663	16,742
営業外収益		
受取利息	38	15
受取配当金	※1 1,954	※1 3,036
投資不動産賃貸料	27	22
為替差益	1	—
雑収入	※1 303	※1 394
営業外収益合計	2,325	3,468
営業外費用		
支払利息	50	36
不動産賃貸費用	49	48
為替差損	—	68
雑損失	※1 35	※1 9
営業外費用合計	134	162
経常利益	15,854	20,048
特別利益		
固定資産売却益	※3 19	※3 9
補助金収入	728	214
投資有価証券売却益	—	0
特別利益合計	747	224
特別損失		
固定資産売却損	※4 2	※4 5
固定資産除却損	※4 58	※4 456
固定資産圧縮損	657	206
投資有価証券評価損	0	5
特別損失合計	718	673
税引前当期純利益	15,883	19,599
法人税、住民税及び事業税	3,619	4,345
法人税等調整額	341	△790
法人税等合計	3,961	3,555
当期純利益	11,922	16,044

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）

（単位：百万円）

	株主資本								
	資本金	資本剰余金		利益剰余金					
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金				利益剰余金合計
					特別償却準備金	配当準備積立金	別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	34,928	34,636	34,636	695	22	4,500	65,600	15,085	85,903
当期変動額									
特別償却準備金の積立					0			△0	－
特別償却準備金の取崩					△4			4	－
別途積立金の積立							6,000	△6,000	－
剰余金の配当								△3,060	△3,060
剰余金の配当（中間配当）								△2,737	△2,737
当期純利益								11,922	11,922
自己株式の取得									
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）									
当期変動額合計	－	－	－	－	△3	－	6,000	128	6,124
当期末残高	34,928	34,636	34,636	695	18	4,500	71,600	15,213	92,027

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△6,055	149,413	520	520	149,933
当期変動額					
特別償却準備金の積立		－			－
特別償却準備金の取崩		－			－
別途積立金の積立		－			－
剰余金の配当		△3,060			△3,060
剰余金の配当（中間配当）		△2,737			△2,737
当期純利益		11,922			11,922
自己株式の取得	△10,000	△10,000			△10,000
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			△64	△64	△64
当期変動額合計	△10,000	△3,876	△64	△64	△3,940
当期末残高	△16,055	145,537	455	455	145,992

当事業年度（自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益剰余金				
		資本準備金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金			
					特別償却準備金	配当準備積立金	別途積立金	繰越利益剰余金
当期首残高	34,928	34,636	34,636	695	18	4,500	71,600	15,213
当期変動額								
特別償却準備金の取崩					△4			4
別途積立金の積立							7,000	△7,000
剰余金の配当								△2,678
剰余金の配当（中間配当）								△2,678
当期純利益								16,044
自己株式の取得								
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	－	－	－	－	△4	－	7,000	3,690
当期末残高	34,928	34,636	34,636	695	14	4,500	78,600	18,904

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△16,055	145,537	455	455	145,992
当期変動額					
特別償却準備金の取崩		－			－
別途積立金の積立		－			－
剰余金の配当		△2,678			△2,678
剰余金の配当（中間配当）		△2,678			△2,678
当期純利益		16,044			16,044
自己株式の取得	△0	△0			△0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			804	804	804
当期変動額合計	△0	10,685	804	804	11,490
当期末残高	△16,056	156,223	1,259	1,259	157,483

【注記事項】

（重要な会計方針）

1 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

総平均法に基づく原価法

その他有価証券

時価のあるもの

事業年度末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は総平均法により算定）

時価のないもの

総平均法に基づく原価法

2 たな卸資産の評価基準及び評価方法

評価基準は原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）によっております。

（1）商品、製品、仕掛品及び原材料

総平均法

（2）貯蔵品

最終仕入原価法

3 固定資産の減価償却の方法

（1）有形固定資産及び投資不動産（リース資産を除く）

定率法を採用しております。

なお、主な耐用年数は建物が3年～50年、機械及び装置が4年～17年であります。

（2）無形固定資産

ソフトウェア以外の無形固定資産の減価償却方法は、定額法によっております。市場販売目的のソフトウェアについては、見込販売数量に基づく償却額と残存有効期間（3年以内）に基づく均等配分額とを比較し、いずれか大きい額を計上しております。

（3）リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

4 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、事業年度末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

5 引当金の計上基準

（1）貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

（2）賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、支給見込額を計上しております。

（3）退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

6 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理方法

消費税及び地方消費税の会計処理は税抜方式によっております。

(追加情報)

(繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針の適用)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第26号 平成28年3月28日）を当事業年度から適用しております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
短期金銭債権	13,452百万円	12,039百万円
短期金銭債務	666	630

※2 担保提供資産及び担保付債務等

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
現金及び預金	2,850百万円	2,750百万円

担保付債務等は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
従業員預り金	1,766百万円	1,753百万円
関係会社の借入金	838	828
計	2,605	2,582

(注) 前事業年度及び当事業年度において、上記担保付債務等以外に、現金及び預金のうち100百万円は一般財団法人浜松光医学財団の当座貸越契約の担保に供しております。

※3 期末日満期手形

期末日満期手形の会計処理については、手形交換日をもって決済処理しております。なお、当事業年度の末日が金融機関の休日であったため、次の期末日満期手形が期末残高に含まれております。

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
受取手形	一百万円	240百万円

※4 有形固定資産

国庫等補助金により取得した資産につき取得価額から控除されている圧縮記帳額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
建物	752百万円	750百万円
構築物	0	0
機械及び装置	2,278	2,474
車両運搬具	0	0
工具、器具及び備品	358	367
土地	573	573

当事業年度において補助金の受入れにより行った圧縮記帳額は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
建物	464百万円	一百万円
機械及び装置	115	196
工具、器具及び備品	—	9
土地	77	—

※5 投資不動産の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
建物	114百万円	103百万円
構築物	0	0
機械及び装置	0	—
工具、器具及び備品	14	14
計	129	117

上記資産の主な賃貸先は、一般財団法人浜松光医学財団であります。

6 偶発債務

次の関係会社について、金融機関からの借入れに対し債務保証を行っております。

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
浜松電子プレス(株)	476百万円	438百万円
北京浜松光子技術股份有限公司	1,157	—
計	1,633	438

(注) 前事業年度及び当事業年度において、上記以外に、浜松光子学科学儀器（北京）有限公司における顧客からの前受金について、金融機関が行っている契約履行保証に対して、50百万中国元を上限として再保証を行っております。

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当事業年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
営業取引による取引高		
売上高	57,798百万円	64,014百万円
仕入高	6,541	5,551
営業取引以外の取引による取引高	2,497	3,445

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額並びにおおよその割合は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当事業年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
運賃及び荷造費	936百万円	1,006百万円
広告宣伝費	237	240
給料	4,587	4,827
賞与引当金繰入額	790	983
退職給付引当金繰入額	254	344
減価償却費	1,119	1,044
支払手数料	2,661	2,798
研究開発費	11,608	11,529
貸倒引当金繰入額	4	0
おおよその割合		
販売費	39%	37%
一般管理費	61%	63%

※3 固定資産売却益の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当事業年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
機械及び装置	0百万円	3百万円
車両運搬具	0	1
工具、器具及び備品	18	5
計	19	9

※4 固定資産売却損及び固定資産除却損の内訳は次のとおりであります。
(固定資産売却損)

	前事業年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当事業年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
機械及び装置	0百万円	5百万円
工具、器具及び備品	1	0
計	2	5

(固定資産除却損)

	前事業年度 (自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日)	当事業年度 (自 平成28年10月1日 至 平成29年9月30日)
建物	40百万円	404百万円
構築物	0	12
機械及び装置	8	13
車両運搬具	0	0
工具、器具及び備品	8	26
建設仮勘定	—	0
計	58	456

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式（当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式8,357百万円、関連会社株式23百万円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式8,322百万円、関連会社株式23百万円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
繰延税金資産		
退職給付信託設定額	3,034百万円	3,053百万円
減価償却費限度超過額	1,749	1,758
退職給付引当金限度超過額	1,509	1,652
賞与引当金限度超過額	998	1,219
たな卸資産評価損	410	416
役員退職慰労金	—	290
未払事業税	169	254
減損損失	238	238
投資有価証券評価損	220	207
その他	1,025	843
繰延税金資産小計	9,355	9,932
評価性引当額	△1,422	△1,201
繰延税金資産合計	7,932	8,731
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額	21	288
資産除去債務に対応する資産	11	10
特別償却準備金	7	6
その他	0	12
繰延税金負債合計	41	317
繰延税金資産の純額	7,890	8,413

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成28年9月30日)	当事業年度 (平成29年9月30日)
法定実効税率	32.33%	30.21%
(調整)		
税額控除	△6.70	△6.95
受取配当金等永久に益金算入されない項目	△3.73	△4.40
評価性引当金の増減	0.11	△1.15
交際費等永久に損金算入されない項目	1.05	0.79
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	2.50	—
その他	△0.62	△0.36
税効果会計適用後の法人税等の負担率	24.94	18.14

(重要な後発事象)

(自己株式の取得及び消却)

当社は、平成29年11月13日開催の取締役会において、会社法第165条第3項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づき、自己株式取得に係る事項を決議するとともに、会社法第178条の規定に基づき、自己株式を消却することを決議いたしました。

1 自己株式の取得及び消却を行う理由

経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行及び株主還元策の一環として、自己株式の取得及び消却を行うものであります。

2 取得に係る事項の内容

(1) 取得対象株式の種類

当社普通株式

(2) 取得し得る株式の総数

3,000,000株 (上限)

(発行済株式数 (自己株式を除く) に対する割合1.90%)

(3) 株式の取得価額の総額

10,000百万円 (上限)

(4) 取得期間

平成29年11月14日～平成30年3月23日

(5) 取得方法

東京証券取引所における市場買付

3 消却に係る事項の内容

(1) 消却する株式の種類

当社普通株式

(2) 消却する株式の数

上記2により取得した自己株式の全数

(3) 消却予定日

平成30年4月20日

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首 残高	当期 増加額	当期 減少額	当期 償却額	当期末 残高	減価償却 累計額
有形固定 資産	建物	23,077	5,109	404	2,340	25,441	36,524
	構築物	1,726	173	12	203	1,683	2,246
	機械及び装置	9,288	4,299	215	4,267	9,105	66,222
	車両運搬具	28	12	0	13	28	136
	工具、器具及び備品	2,944	1,844	47	1,776	2,963	25,508
	土地	14,458	62	—	—	14,520	—
	リース資産	122	189	—	64	247	186
	建設仮勘定	4,564	10,457	9,587	—	5,433	—
	計	56,210	22,148	10,268	8,666	59,424	130,825
無形固定 資産	特許権	348	0	—	105	243	—
	ソフトウェア	589	460	—	381	668	—
	その他	16	—	—	0	15	—
	計	955	461	—	487	928	—
投資その 他の資産	投資不動産	129	5	0	17	117	1,230
	計	129	5	0	17	117	1,230

(注) 1 当期増加額の主な内容は次のとおりであります。

建物

新貝工場第1棟建築工事（光半導体素子） 3,053 百万円

豊岡製作所第1棟改修工事（光電子増倍管） 1,039

機械及び装置

光半導体素子製造用設備 1,146

光電子増倍管製造用設備 818

研究開発用設備 715

工具、器具及び備品

光半導体素子製造用設備 558

研究開発用設備 317

画像処理・計測装置製造用設備 254

建設仮勘定

都田製作所第3棟建築工事 3,089

新貝工場第1棟建築工事（光半導体素子） 2,473

豊岡製作所第1棟改修工事（光電子増倍管） 406

2 当期減少額の主な内容は次のとおりであります。

建設仮勘定

新貝工場第1棟建築工事（光半導体素子） 3,610

豊岡製作所第1棟改修工事（光電子増倍管） 1,235

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	51	52	51	52
賞与引当金	3,303	4,037	3,303	4,037

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	10月1日から9月30日まで
定時株主総会	12月中
基準日	9月30日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座に記録された単元未満株式に関する取扱い) 名古屋市中区栄三丁目15番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部 (特別口座以外の振替口座に記録された単元未満株式に関する取扱い) 振替口座を開設した口座管理機関（証券会社等）
株主名簿管理人	(株主名簿管理人及び特別口座の口座管理機関) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告により行い、当社ウェブサイトに掲載いたします。 (http://www.hamamatsu.com/ja/ir/index.html) ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告によることができない場合は、日本経済新聞に掲載してこれを行います。
株主に対する特典	該当事項はありません。

（注）当社は、定款で単元未満株式の権利を以下のように制限しております。

当会社の単元未満株式を有する株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。

- ①会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- ②会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- ③株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第69期（自 平成27年10月1日 至 平成28年9月30日）平成28年12月16日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

平成28年12月16日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第70期第1四半期）（自 平成28年10月1日 至 平成28年12月31日）平成29年2月10日関東財務局長に提出

（第70期第2四半期）（自 平成29年1月1日 至 平成29年3月31日）平成29年5月11日関東財務局長に提出

（第70期第3四半期）（自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日）平成29年8月9日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

平成29年10月20日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号（代表取締役の異動）に基づく臨時報告書であります。

(5) 自己株券買付状況報告書

報告期間（自 平成29年11月14日 至 平成29年11月30日）平成29年12月11日関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

平成29年12月22日

浜松ホトニクス株式会社

取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 市 村 清 ⑩
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 相 澤 範 忠 ⑩
業務執行社員

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている浜松ホトニクス株式会社の平成28年10月1日から平成29年9月30日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、浜松ホトニクス株式会社及び連結子会社の平成29年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、浜松ホトニクス株式会社の平成29年9月30日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、浜松ホトニクス株式会社が平成29年9月30日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. X B R Lデータは監査の対象には含まれていません。

平成29年12月22日

浜松ホトニクス株式会社

取締役会 御中

新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 市 村 清 ⑩
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 相 澤 範 忠 ⑩
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている浜松ホトニクス株式会社の平成28年10月1日から平成29年9月30日までの第70期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、浜松ホトニクス株式会社の平成29年9月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2. X B R Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成29年12月22日
【会社名】	浜松ホトニクス株式会社
【英訳名】	HAMAMATSU PHOTONICS K. K.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 晝馬 明
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	静岡県浜松市東区市野町1126番地の1
【縦覧に供する場所】	浜松ホトニクス株式会社東京支店 (東京都港区虎ノ門三丁目8番21号虎ノ門33森ビル) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

当社代表取締役社長晝馬明は、当社並びに連結子会社及び持分法適用会社（以下「当社グループ」という）の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものです。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である平成29年9月30日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しました。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社グループについて、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社グループ9社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。なお、当社グループのうち連結子会社9社及び持分法適用関連会社3社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、当連結会計年度の売上高予算（連結会社間取引消去前）の概ね2/3に達している4事業拠点を「重要な事業拠点」としました。選定した重要な事業拠点においては、当社グループの事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及びたな卸資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社グループの財務報告に係る内部統制は有効であると判断しました。

4 【付記事項】

該当事項はありません。

5 【特記事項】

該当事項はありません。